

特36

865

圓光天師傳

六



勅修圓光大師御傳記第二十一

上人はゆみに修る社々の御詞

上人の語るく。口傳なくして浄土に法門を忍ぶは。

往生に得分をえうりなぬなり。其故ハ極樂に往

生ハ上る天親龍樹をすめ。下ハ末世乃凡夫十

悪五逆此罪人まです。之後へ里。志るる我々の身

ハ家下の凡夫まで。善人をまゝめ給へる文を見え。

早下乃心をたぐて。往生を不定におひひて。願次

此往生を得はるなり。志るる善人をすめ給へる

る石をハ善人の分と見。悪人を勧め給へる所をは



カク印事已...

一







信此念佛のれりなり。其故ハ。阿弥陀佛ハ。一念よ一度乃往生哉あてを記終へる願を此ハ。念よに往生此業とれるなり

又云。煩惱此うすくあけきををくわらば罪障の軽き重きを色沙汰せぬ。たゞ口に南無阿弥陀佛と唱へて。聲よはきて。決定往生此れひをれまじ

又云。きこひ餘事をいとむむも。念佛を申しこ此をするとれひをあせ。餘事残る念佛もとなれりよぬく

又云。往生哉福くひ。極樂よまのん事残まめやうに

れきこひ入たる人の氣色ハ。世此中をひとくのみ。根きこ色よて常よはある也

又云。人の命ハ食事此時むせく死する事をもなり。南無阿弥陀佛とかくと。南無阿弥陀佛やのこ入るきなり

又云。法此道理と云事あり。ほのほハ空りのわ。水ハくぐりちまになが流。菓子此中り。と記物あり

阿ま記物あり。こまこつハこれ法此の道理なり。阿弥陀佛乃本願ハ。名号残もて罪惡此衆生をこちびうんとちうひ候と記も。たゞ一向よ念佛たよを申せ



と。佛如来近ハ法余の道理こそうごひなり  
又云。善導此釋を拜見するに。源空が目より。三心も  
南無阿弥陀佛。五念も南無阿弥陀佛。四修も南無  
阿弥陀佛なり

又云。弘願とくろハ。如大經說。一切善惡九夫得生者。  
莫不皆乘阿弥陀佛大願業力。為増上縁也。善導  
釋し終へり。予がこれ不堪の身ハ。ひとくもきぶ  
弘願をたのみぬり

又云。我ハ此烏帽子をきげら男なり。十惡の法然  
房愚癡の法然房が。念佛して往生せんと言なり

又云。学生骨となりて。念佛やうになりんぬん  
又云。本願の念佛より。ひとりだち我をうせて。まけを  
けぬぬあり。すけといぬり。智恵をもすけよき。持戒を  
もすけよき。道心我もすけよき。慈悲をもすけよ  
き。すれわ。善人の善人なり。念佛。悪人の悪人なり  
ら念佛して。きむむ此つきれまにて念佛も人  
を。念佛もすけよき。ぬとい云也。けわなぐ。悪をわ  
らため。善人となりて念佛を人ハ。佛の御心り叶  
る。のなりぬ物ゆへ。とあらんか。らんと。思て。安  
心おろぬ人ハ。往生不定此人なり



又云。佛告阿難。汝好持是語。持是語者。即是持無量壽佛名といふなり。名号をまきくといふと信ぜず。まきくは信むといふなり。たとひ信むといふも唱へば信む。信むは信むといふなり。常は念佛まきくは信むなり。

又云。近來此行人觀法をかす奉れり也。佛像を觀むとも運慶康慶が造たり佛に觀むとも觀しあはれり。極樂に莊嚴を觀むとも。楊梅桃李は花菓に觀む。觀しあはれり事なり。たゞ彼佛今現在世成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生。此釋を信じて。ふくく本願をたのむこと。一向は名

号を唱べし。名号は唱む。三心を此つゝ具足も也。又云。往生は業成就。臨終平生につくはべし。本願は文簡別せざるなり。惠心は心也。平生につくるとんをきり。又云。他力本願は乘せざるに二あり。乘せざるに二あり。乘せざるに二あり。一は罪をつくるとき乘せぬ。其故はかくれり。罪はかくれり。念佛申とも往生不決定なりとれり。時乘せぬ。二は道心のおらざる時乘せぬ。其故はかくれり。念佛申とも。かくれり。道心ありて申さざる念佛す。てこそ往生はせんず。此無道心よては念佛す。てこそ往生はせんず。道心をさ



たして。本願をつきにたもふ時乗せざるなり。次  
は本願に乗ずるに二の様といぬ。一は罪はくする  
時乗するぬ。其故は。かくれく罪をたくる。決定  
して地獄に落べし。去るは本願の名号を唱まひ。  
決定往生せん事のうれしはよやうらなむ時乗  
ずるなり。二は道心たると時乗するなり。其故は。  
此道心よて往生すべうら。されば道の道心は。無始よ  
りこれたこれとも。いま生死をたれま。故は  
道心は有無を論せ。造罪は輕重をいり。本  
願の稱名は念に相續せんちくによりてぞ。往生

ハ遂にきとたふ時。他力本願に乗するなり  
又云。せこにあたる麻も。友も目をうけ。して人景  
よかく。むむいなる方へ。たひひきりて。まひくによ  
く。いも人あはれ。まはる。けく。なり。  
それ定は他力をうけ信して。萬事た。て。往生  
はとげんとたもふ。きなり  
又云。稱名の時。心におもた。べき。人の膝あど  
たひき。かして。や。た。け。と云定なるべ  
又云。七日七夜心無間といぬ。明日は大事た。と。  
今日もげむ。く。なり



又云。人の手より物を得んむらに。すぢよ得たらんと  
いまい得る家といづまら勝るまき。源空ハすぢよ得た  
る心地よて念佛ハ申なり

又云。往生ハ一定と思へむ一定れ也。不定と思へむ不定也  
又云。念佛申さんをもれ十人あらんよ。たとひ九人の臨終  
あしくて往生せぬも。我一人ハ決定して往生すしと思へ  
又云。一丈の堀をこそんと思はん人ハ。一丈五尺をこそ  
んことげむなり。往生哉期せん人ハ。決定乃信を  
とりてあひもげむべきなり

又云。いけぬハ念佛の功はとり。志れハ浄土へま

いりたん。とてをかくてを。此方ハ思ひまづよ事  
ぞかきと思ぬまき。死生にまづらひなり

或時上人。あつれ此度志おほせむやかと仰れ  
る哉。棄願房承て。上人だよもか換よ不定なる  
信の修らんよ。それ餘の人ハいづらう修べきと申々  
れを。上人おもしろひ後て。まけく蓮臺にのん

まてハ。いづらう此思ひハまえ修へきとぞ乃後も

或人上人の申させ給ふ御念佛ハ。念ふごとに佛乃以  
心よのかり修らんなど申々るを。いれまこと上人  
うらうといまづれを。智者にておろませハ。名号此功



徳をのくつしをあるしめし。本願の様をとあきく  
うに心得あるゆふと申うると記。汝本願を信じ  
る事まじくわらざる。弥陀如来の本願乃名号ハ本  
らわ草うわ。業はく水もむたぐひじときれもの。  
内外どりにくけて。一文不通なるがとなぬまハ必む  
まろや信じて。眞實に祈ひて。常に念佛申我寂  
上は機とす。まじく智慧をもちて生死をまぬるを  
くハ。源空いうてうかの聖道門をすく。これ浄土門  
又趣へきや。聖道門乃修行ハ。智慧をきりめく生死  
滅るを純。浄土門の修行ハ。愚癡ふくつわて極樂に

むまらぬとあるしとぞ仰くはた

又人々後世に事申うらはるるに。往生ハ魚食せ  
ぬものこそすれといふ人あり。或ハ魚食するに  
こそすまといぬ人あり。とかく論じたるは。上人き  
て。魚食ぬに往生をせんハ。務ぞせんずる。魚  
くしぬものせんは。猿ぞせんぞ。猿くしぬもの  
くしぬものより。次こそ念佛申も。此往生ハすく  
源空ハあちたるとぞ仰くはた

上人御往生に後三井寺の住心房に夢乃中にとりて  
を。念佛のまじく風情をぬき。まじく申より。外に事ハ  
上人を





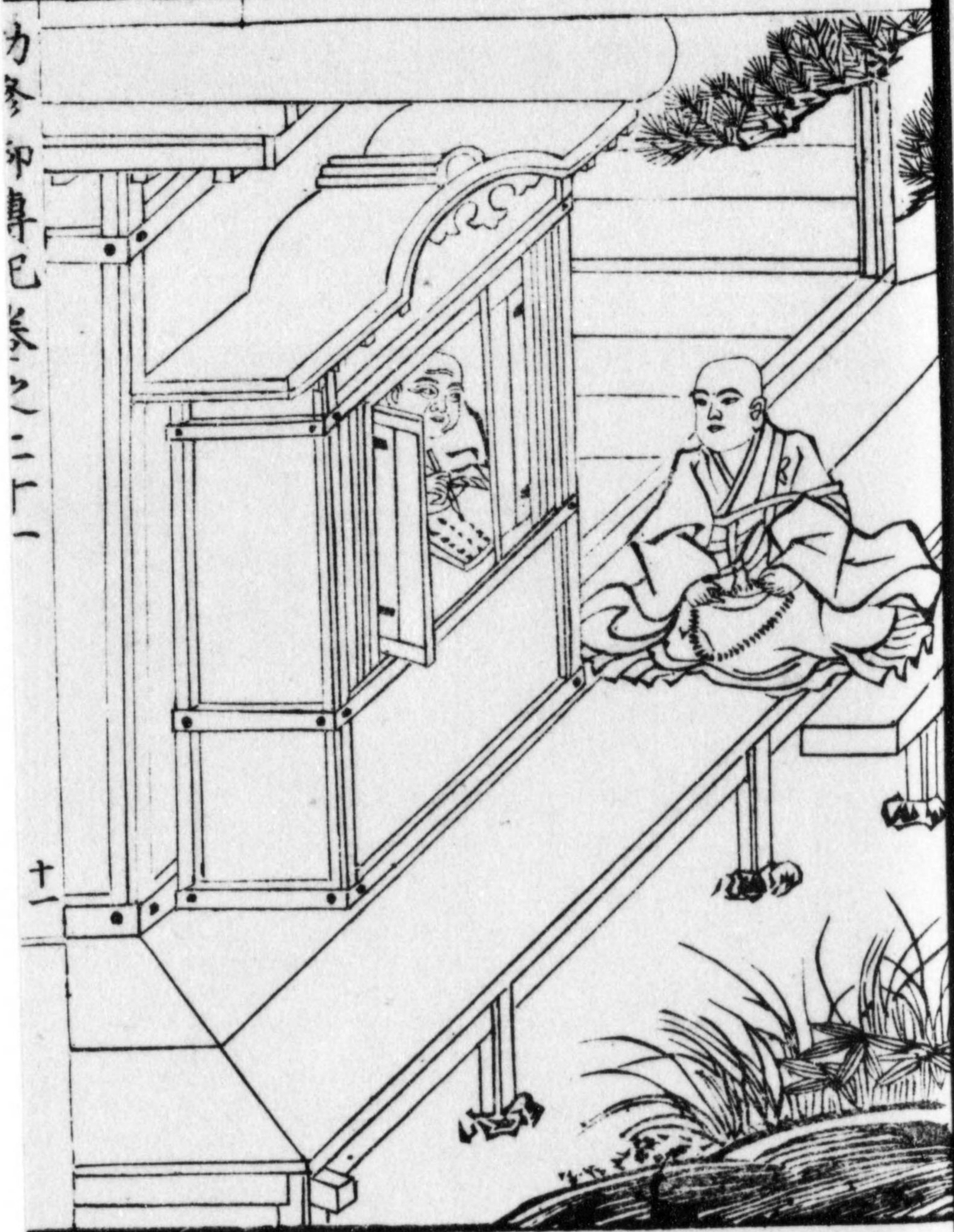


又一紙よのせての後も。末代の衆生を。往生極樂の機よあててくるるに。行すくなしとてを疑へう。一念十念よ足ぬる。罪人ありとても疑る。罪根ありとても疑る。時々此とてを疑へう。法滅以後此衆生お成きて往生すべし。況近來をわ。我身もろしとても疑る。身はこれ煩惱具足せる凡夫也。西方よ浄土おわると西方を願ハ。十惡五逆此衆生れ生る。故なり。諸佛のなうに弥陀よ歸したてより。三念五念よ至るまで。來迎し。後故なり。諸行

の中に念佛を用ふ。この佛れ本願なる故也。いま弥陀の本願に乗じて往生したん。願として成せ。次と云事あるべし。本願よ乘する事ハ信心れあり。此よよるべし。受けざる人身をうけてあひ。まき本願よあひて。おし。道心を發して。かた輪廻此里。生きたる浄土よ往生せん事。悦乃中此悦なり。罪ハ十惡五逆の者と生むと信じて。少罪を犯さしと思ふ。罪人をむま。況や善人をや。行ハ一念十念が成む。と信じて。無間よ修すべし。一念おを生る。況や多念



をや。阿弥陀佛ハ不取正覺の言を成就して。現は彼國にまゝはせは。定て余終の時ハ来迎し給らん。釋尊ハ善哉我教も随て。生死を離と知見し給ひ。六方此諸佛を悦哉我證誠を信じて。不退の浄土も生や悦給らん。と天よ侈き地も卧て悦べし。このび弥陀の本願もあふ事哉。行住座卧もも報もべし。う此佛の恩徳を頼ても頼なきハ乃至十念乃詞信。トても猶信まぐきハ必得往生此文也。此書世間よ流布も。上人の小消息といふは。あまはなり。



力參印身已卷之三十一



上人念佛の行者此心得るに様哉をへ後へる事あ  
わ所謂<sup>いひ</sup>此ハ阿弥陀をこそたのこそ也。念佛をこそ  
信<sup>ま</sup>たきとて諸佛菩薩乃悲願<sup>ひがん</sup>をうへりめ多てま  
つわ。法華般若等此目出<sup>め</sup>き此經とをを。且らくたを  
ひ。そ一依事ゆめくみるるる次。阿弥陀佛哉信<sup>ま</sup>  
たまばとて。よろ所の佛をこそあわ。せらく乃聖教を  
疑ひを志<sup>ま</sup>しきとんすまの。信心<sup>しん</sup>此ひがとたるにてある  
べき也。信心たごりくはる。阿弥陀佛此心よ叶<sup>ま</sup>  
まド々此ハ念佛をこそを。弥陀の悲願<sup>ひがん</sup>よと此ん事ハ  
一定<sup>ぢやう</sup>なり。又罪<sup>つみ</sup>をほくくドははしりてよりん

やすりの。弥陀の本願をかりむるにてこそあ也。又  
念佛を多く申さんとして。日々に數返<sup>す</sup>れりず我はむ  
ハ。他力をうたがふりくこそあ也なごいふ事此多  
くきこゆる。加様の僻事<sup>ひやく</sup>ゆめくもちあるべり。次  
のり此此あも。阿弥陀佛ハ罪つくまことすめ後こ  
る。あ也ひとくよわるるに悪<sup>あく</sup>をもとく免<sup>ま</sup>え次罪<sup>つみ</sup>をの  
こはくりあははるに。くも極く染<sup>せん</sup>もたなり虚言<sup>そらごと</sup>を  
くもいごて。そのも志<sup>ま</sup>ぬ男女此輩<sup>とが</sup>哉とくは  
居<sup>い</sup>り。罪業をすまめ煩惱<sup>ぼんごう</sup>をおこさむる事。志  
くくなむこ此天魔<sup>ま</sup>れたらひなり外道<sup>がう</sup>の志<sup>ま</sup>りな



わ。往生極樂のあつてきなりと思ふ。又念佛此  
數を多く申すれを。自力をたげむといぬ事。是  
すも此れも先んず。あさましき僻事なり。おと一  
念二念をとらふとも。自力此心なりん人の自力此  
念佛とすべし。千遍萬遍哉となく。百日千日よひ  
るもけそはとむとも。偏願力をたのめ他力あ  
ふたふらん人の念佛の聲を念とあうなり。他  
力此念佛よてあらる。さ此を三心をおこし  
人の念佛の。日よ夜よ時よ剋に唱まとも。あうな  
う願力を修き他力此の心よて唱居き

此が。かけてもふれとも。自力此念佛といぬべし  
次。三心と申事。乃子細をあらわたる人の念  
佛よ三心具足せん事。左右よ及ば次。はやく三心  
此名哉。よもあうぬ無智此輩の念佛の。い  
う三心具し候べき。申人よ候やん。これをも  
事にて候なり。たどひ三心此名哉。たもあうぬ無  
智此者なり。此を。弥陀の誓哉頼ま。すも  
疑ぬ心なくして。此名号を唱ま。これ心即三心  
具足此心よてあるなり。さ此をまひに信じて  
かたにも念佛を。三心の。具もるな



り。けさこしをどうにあさました一文不通此輩の中  
もと。一もちに念佛する者ハ臨終正念して目出き  
に往生をむむれ。こは現證あつたなる事なり。露  
塵を疑ぬるべし。中くよとあぬ三心沙汰し  
て。あつたよ心得きる人くハ臨終も思ふ様なり  
ぬ事れほし。りれよときこもく心得べき也。又こ  
きく別時此念佛を修して。心を身をもをげまじ  
とれくもむべきなり。日くに六万遍七万遍を唱へ  
む。けこも足ぬべた事にくあれども。人の心さほり  
しこく目なき耳なきぬまがい。いれくやすむ心す

くなく。あけをれハ念として心閑なぬ様よその  
こ。疎略みなりゆくなり。それ心致さぬんためハ  
時々別時此念佛を修すべきなり。あつた善導和  
尚も秘んころりしけり。惠心の先徳もをりし  
をへられたり。道場をこひきはくろひ。花香をも  
備きこまらん事。たかちこれあつたらんりよ  
がふ。ま。ま。我身をもこにきよめて道場よ入て。  
或ハ三時或ハ六時なんと念佛をも。ま。同行  
なとあまこあらん時ハ。あつた。いやく不斷念佛  
よ。修ま。が様此事ハをのく様よ随てよから



好む。善導和尚八月の一日より八日に至るまで。或ハ八日より十五日に至るまで。或ハ十五日より廿三日に至るまで。或ハ廿三日より晦日といふまで。或ハ七日別時を常に修む。ゆゑくすむる事ともない。好むものよす。はまきて。不善れ心あるべし。臨終正念は安住して。目ハ阿弥陀ほとけをたがこ。口ハは弥陀れ名号を唱へ。心ハ聖衆乃來迎を待てまつるへ。年比日比いづれ念佛の功を積たわると。臨終る悪縁もとあひ。最後にあき心も

れらうて。念佛の心行を退しぬるを此なり。順次の往生志む。一生二生なりとも。三生四生なりとも。生死のなうれよ。出離れ道よ。とこほらん。まめやうに心う。口惜き事ぞ。し。これぞ善導和尚れ御まめ。願弟子等臨命終時。心不顛倒。心不錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心快樂。如入禪定。聖衆現前。乘佛本願。上品往生。阿弥陀佛國也。祈んころよ。教願せよ。の。後へ。いよく臨終の正念をいいのわ。祈んころよ。願き事なり。臨終れ正念れいれ。弥陀の本願をたのまぬもの



好む。善導和尚ハ月の一日より八日に至るまで。  
 或ハ八日より十五日に至るまで。或ハ十五日より廿三日  
 に至るまで。或ハ廿三日より晦日よひつゝあまたと修  
 じきり。面々指合さしあひけしん時をもちひて。七日ハ別時  
 を常に修おんむべし。ゆゑなくすむる事ともないぬもの  
 よす。はきて。不善あま心あるべし。次つぎもさうにもく  
 臨終えんじゆう正念せいねんハ安住あんぢゆうして。目ハ阿弥陀あみだほとけをわが  
 こ。口ハは弥陀あみだ名号なごうを唱となへ。心ハ聖衆せいしゆん乃来迎らいぎやうを  
 待まちつてまゐるへし。年とし比日ひ比ひいさぐ念ねん佛ぶつの功こうを積つ  
 たわとも。臨終えんじゆうハ惡縁あくえんもとあひ。最後さいごにありき心も

ねらうて。念佛ねんぶつの心行しんぎやうを退たいしぬるを此こなりと。順しゆん  
 次つぎの往生いしやう志しもびし。一生いしやう二生にじやうなりとも。三生さんじやう四生しじやう  
 なりとも。生死しやうじのなり此こも志しもひく。出離しゅぢりハ道みちも  
 とくもらんとも。まあやうに心こころも口くち惜おしき事ことぞら  
 し。此これぞ善導ぜんどう和尚わしやうハ御おんまめよ。願ねん弟子でし等らう臨りん  
 命終時めいしゆうじ心しん不顛倒ふてんたう。心しん不錯乱ふさくらん。心しん不失念ふしねん。身み心しん無諸苦むしよこ  
 痛いた。身み心しん快樂くわいらく如ごと入い禪定ぜんぢやう。聖衆せいしゆん現前げんぜん乘佛じやうぶつ本願ほんがん上品じゆんひん往りやう  
 生阿弥陀佛國あみだぶつこく也。祈いのちんころよ發願はつがんせよとの後のちハわい  
 よく臨終えんじゆうの正念せいねんをいひのわきし。祈いのちんころよ慮りよき事ことなり。  
 臨終えんじゆうハ正念せいねん成なりいけり。弥陀あみだの本願ほんがんをたのみぬもの







りりり。魔縁ま縁のきりりて往生せいじやう妨さまたぐられわ。あま我  
身のいりりて罪業ざいごふをも滅めつし。極樂ごくらくへまよりの事  
なまばるをあまひとくは阿弥陀佛あみだぶつ此願このねがひ力ちからまで。煩  
惱ぼんごうをものぞき罪業ざいごふもけりて。かきつけなく手はら  
らまげうら。極樂へむくとわて歸かへらせまよしはす事  
也。我ちりりにて往生せいじやうま留とど事ことれらむこそ。われり  
あしといぬ慢心まんしんをばたこさめ。憍慢けうまん乃心こころごにもたこ  
わぬまむ。心行しんぎやううれらばあやまら故ゆゑり。あちとくは  
よ阿弥陀あみだほとけ此願このねがひりそむたぬらまはれよて。弥  
陀も諸佛しよぶつも護念ごねんし給たまはば。さるまよしに悪鬼あくまれた

めにまなまほらまほらまほら。あまはらまほら。憍慢けうまん  
れ心こころばおとすべうら。あれうらこく。あまはらまほら  
よをへをたよまよら。あまはらまほら。上人じやうじん教誡きやうがいの詞ことばを信まを  
て。敢あきらて本願ほんねがひまほらまほら。往生せいじやう乃前途ぜんずを遂まを  
へまはれまほら



勅修圓光大師御傳記第二十一終

勅修圓光大師御傳記第二十二

或人不註名字上人の勸化えんげ歸きしてのち。安心起行あんじんぎぎょう此こゆ  
 うに孝かうぐぐひ申まをるにたきて。あるはうはうはらはら此こるる状じやう云いひ御返  
 事ことはららにううけけききままいのい儀ぎぬ。加か様やうに申まを事こと此こ一いつ分ぶん歩ふささと  
 り哉やそへ。往生おうじやう此こ御心ごしんざざををよくよくなりなり儀ぎぬぬ履りんううんんは。  
 ををそそ此こををももののりりとと儀ぎべきべき事ことにてにて儀ぎりりぬぬ。いくいくたたひひに  
 ここをを申まをたたくくここをを儀ぎへへ。ままととたたりりかか身み此こののややくく。我わが心しん此  
 法はうされれききををののりりとと儀ぎぬぬ。ままととたたりりかか身み此こののややくく。我わが心しん此  
 ののととて。安あん定てい往生おうじやう此こちちりりたたををむむええんんととここををたたああふふととに  
 てて儀ぎへへととも。人ひとの心しんははままくくよよて。ままととひひととままぢぢに。ゆゆめめああるる



る。此らうき世のうりれたの。とらうへをのそりらめて。すべて  
後乃世成もあ。ぬ人も能。又後をたそへき事成思あ  
て。法を免をこたふ人よ法きても。かきこれよ心成うり  
て。ひとすぢに一行をたのまぬ人も能。又いれき此行よて  
も。をこよりころざしを。免れあひそめつるをい。いうれる  
こつり成きけぞも。りやれ此執心をあ。ためぬ人も能。  
又今日い。こ。信をおうて。一まぢにおりひ法きぬ  
とるる程よ。のちにいらちする人も能。くの足能て。おと  
しく浄土の一門よいりて。念佛の一行を。をち。にまもる人  
も。あ。が。く。能事。の。我身一乃なけき。と。い。人。志。此。次。思

能へとも。法よありて人よあ。ぬ理を。う。ない。ぬ。ほ。の。人。  
あり。ぐ。こ。き。世。よ。て。能。ま。や。を。れ。づ。す。く。免。う。ら。ま。能。ま  
も。と。ま。さ。う。あ。れ。づ。う。う。ま。よ。申。い。つ。る。事。を。す。て。ん。ぢ。も  
よ。や。と。思。あ。う。ら。事。の。こ。よ。て。能。事。此。心。う。く。か。好。く。能  
て。い。め。う。い。い。ま。ひ。と。き。い。と。く。浄。土。よ。む。ま。能。て。さ。り。成。ひ。う  
た。の。ら。に。い。そ。れ。此。世。界。に。う。り。き。こ。ら。う。く。神通方便  
を。も。て。結。縁。の。人。を。も。無。縁。の。も。れ。を。も。ほ。む。る。成。も。そ  
る。を。も。これ。も。く。を。念。佛。よ。す。め。い。能。て。浄。土。へ。む。り。い。ん  
と。ち。の。ひ。を。た。う。て。の。こ。こ。を。當。時。此。心。を。も。た。く。さ。む。る  
事。に。て。能。う。これ。お。ほ。せ。よ。ぞ。ま。が。心。さ。く。も。ま。う。く。ある



心比して。あまりにうきうき候へも。その候もて候りも。  
にたす〜いのちめやうに。がよ〜〜を。御沙汰候て。ゆく  
まゑもあやう〜候。往生もたの〜き程よ。思食さ  
〜のちせ臨へ候。詮じてい。人のち〜ひ申候き事にて  
候い候。よ〜〜案じて候候へ。これ事よす候事るは  
大事なるにとふ候へき。この世に名聞利養い。中く申な  
〜ゆたにちいあ〜〜候。をぐて昨日今日まれにさ  
〜ざりそにえちたるも。れさよて候めれも。事あ  
〜〜を申たゆるにち及候り候。そ〜心候  
志げめて思食も〜〜候へ候。されよの聖道浄土の二

門を心えしうちて。浄土此一門よ〜候。ま〜ま〜き由候申  
候き。いまい浄土門よ候きて行を候き様を申候。浄土り  
往生せんと候もらん人の安心起行と申て。心と行と相應ま〜  
き候り。それ心とりの観無量壽経よときて。ち〜衆生あ  
て。この國よむまれんと候もらんもの。三種れ心をた〜てす  
れのち往生す。た〜をうと候。一よの至誠心。二よの深心。三  
よの廻向發願心なり。三心を具せるもの。かあ〜候。此國よ生  
とりの善導和尚これ三心を釋〜といも〜。ち〜至誠心。至と  
いと。真なり。誠といも。實れ也。一切衆生の身口意業に修るも  
不の解行のち〜候。真實心乃中りなす。き〜候。あ〜ん



と思ふ。外あつよの賢善精進けんぜんしやうじんの相さうを現げんし。内うちよの虚假こけをいづく事  
致いたえげま。内外明闇ないげやうあんをえづくの次つぎ。うれら次つぎ真實じしつをもちあふ。  
かろくゆへよ至誠心しじやうしんとなづくといひあり。これ釋しやくの心の至誠心しじやうしんとい  
て。真實心じしつしんなり。それ真實じしつといも身みよゆるまひ口にいひ心  
りれをりん事こと。まふほよこれ心を具ぐまべきゆりすなり。ち  
内うちいむゆしうて。おかをこのざら心こころなれをいゆあり。此心こころも。  
うた世よをそむきておとのもちにおもむくとおがきんく此  
中ちゆうにおほく用意よういすまき心をよめて佛ぶつなり。けまも人もいゆる  
りなれゆめ此世こゝ致いた執しやくむるころれふうりしなごらんに  
て。わろくりほく。名聞利養なもんりやう見みづたにふるすてたるふら

りをかすいもどき事ことにして。今世いまはまにそ心こころれきけのうらほ  
きにそりなりて。さうりあらた世間ようかん此人こゝ乃すなはち。心をばあつ次つぎ。さう  
とかをいしうらを。これそい本意ほんいをた心こころざりきり心こころよ  
て。まよこれほり致いたうきとれきて。うすらなる住所すしよをたづぬる  
まても。心の志しのあらん考かうめをばはぎたあつて。本尊道ほんぞんどう  
場ばの莊嚴しやうげん。まうたのうちに花はなのこざらなごの。心こころがうくその  
ありれならん。とがうを。人ひとよ見みえきうせん事こと致いたれと執しやくむ  
るほどに。はゆ此事こゝを人のそり里さとならん事ことあつと。おを  
ひいとれむ心こころありほうにたれひま。ゆ事ことなり。か様かやうなる心  
よのそなりて佛ぶつ乃すなはちちのひをたのそ往生おんじやう致いた福ふくがりんとりふと



は。たのひいさ波沙法もせぬ事此。至誠心くけく。往生せぬ心をよめて候なり。又く申候へも。ひとよ今世此人目をむいゝあてをありなん。人のそ志ををりちぬげよきをぞ申候よめて候なり。人目をみ見る事候へとも。うきをのそれもひいきて。往生此はわりよなるかた候べく。なり見ぬやにひきなき候なり事此。返くをりよくち候へ候へも。此身にあたりても。此心えはせまのせんがために申候なり。これ心よりはきて四句此不同あり。一よ外相いたらうてよて内心の貴くぬ人あり。二よ外相も内心もまたに貴くぬ人あり。三よ外相いたらうてもあてて内心の貴くぬ人あり。四よ内外またに貴き人あり。これ四人の中に。さたの二人いいまき。ゆところ此至誠心くけたる人なり。あま候虚假の人となはしべ。のちの二人い。至誠心具なる人あり。これ真實此行者となづべ。されを詮するおい。あま内心よゆとの心をたして。外相をばあもあまも。さてもかくてもあまきかおぼえ候也。たあまも此世候いらん事を。極樂を祈りん事も。人目をかり候にきりて。ゆとの心をたすまきよて候也。是を至誠心と申候なり。二よ深心といも。善導の釋よもく。深心といも。すれりちこれあま信する心なり。こまに二種あり。一よ安定とあま。二よ牙の煩惱具

人あり。四よ内外またに貴き人あり。これ四人の中に。さたの二人いいまき。ゆところ此至誠心くけたる人なり。あま候虚假の人となはしべ。のちの二人い。至誠心具なる人あり。これ真實此行者となづべ。されを詮するおい。あま内心よゆとの心をたして。外相をばあもあまも。さてもかくてもあまきかおぼえ候也。たあまも此世候いらん事を。極樂を祈りん事も。人目をかり候にきりて。ゆとの心をたすまきよて候也。是を至誠心と申候なり。二よ深心といも。善導の釋よもく。深心といも。すれりちこれあま信する心なり。こまに二種あり。一よ安定とあま。二よ牙の煩惱具



足せる罪惡生死の凡夫なり。善根薄少して。曠劫より  
こ此加つよに流轉して。出離此縁なりと信まへ。二よいぬ  
くかの阿弥陀佛此四十八願を念て。衆生我攝取し給す  
おつら名号を稱念ること。下十聲よいよるまで。此願よ乘  
じて。はさめて往生する事成ると信して。乃至一念をう  
まがふ事なり。此ゆへは深心となづく。又深心といふは。安定して  
心をとて。佛教よ志しうひて修行して。なまじ疑心をのぞ  
くれば。一切此別解別行異学異見異執のきあら。退失  
傾動せず。此ばまことなり。此釋乃心の。もく免よいつ  
身乃ほごを信し。後よ佛の願を信するなり。それ故に。

をしを免此信心をあげて。後の信心我釋し給つる。ま  
ろく此往生我福が人。當よ本願の名号を念となす  
とを。このう心よ貪欲嗔恚此煩惱をもたす。身に十  
惡破戒等此罪惡を念たりたる事あり。まごりに自  
身をのろく免て。身此ほと成るなり。本願を疑ひ候は  
あ。いま此本願に十聲一聲までに往生すといぬ。此ほ  
ろけの人よいあ。トなごを。おほえ候は。志る我善導  
和尚。未来の衆生此。このうごひをたこさん事をうて。  
此二乃信をあげて。我等かいま。煩惱をも断せ。罪  
業を念たり。凡夫おれも。まじ弥陀此本願を信して念



佛を死を。一聲にいつるまで。安定して往生するよりを釋  
したまへる。これ釋のこと心よそそていつくおおえ候なり。  
おことなくせに也。釋し給いざうほは。往生の不定もぞ  
おるえ候いましと。あやうくおぼえ候。はまばこれ候を心え口  
うぬんやん。ワッ心此れは終るべきを。往生のこれとてそい。  
申あひて候め此れ。そのうごひの屋ぞて往生せぬ心よて  
候々るをのを。孝心乃善惡をもうり度。罪れうるき  
れもれをも沙汰せ候。心り往生せんこれひて。口よ南無  
阿弥陀佛とこれへてい。聲よはきて安定往生此思成るす  
べし。その安定心よありて。すれうち往生此業をいさうる

たあり。かく心えよも。往生の不定あり。往生の不定とれもへむ。  
やがて不定なり。一定と思へも。一定なる事にて候なり。此れ  
は詮いふく信むる心と申候。南無阿弥陀佛と申せども。  
その佛此誓にて。いふれ留身をもきうり候。一定むえ候ぞと。  
あつたのて。いふなるが候もうり候。うごふ心のすこ  
をなもきを申候なり。又別解別行此人は屋ぶく此れとて  
申。此よりこと。行となん人のいもんことにつきて。念佛をも  
すて。往生候うごふ事なりと申候あり。乃至等とひ佛き  
うりて光教もれち舌をいだして。煩惱罪惡乃九変。念佛  
して安定往生すやうの事いひが事ぞ。信をへく候といふ







きて。信をたぐしてのちよひ。うれ留人。とく申とも。疑心  
 あましく。彼こそいおほえ能へ。これ深心と申候也。三つ廻  
 向發願心といふ。善導此釋といふ。過去をよひ今生此身  
 口意業。修まるといふ。世出世乃善根。をよひ他の一切  
 此凡聖此身口意業。修まるといふ。世出世乃善根を隨喜  
 して。此自他所修此善根をりて。とくうれ。此真實此深  
 信の心乃中に廻向して。此國よむ此んと願を候なり。又  
 廻向發願といふ。うらば。決定の真實心の中に廻向して。  
 むまるといふ。うらば。思をなせ。此心ゆく信して。なを金  
 剛のどく。異學異見。別解別行。此人のために。動乱破

壞せし。此まこといふ。此釋乃心の。まのまの。うらば。はきこ。う  
 此の世をよひ今生に。身も口も。つくりたる。む功德を。  
 とれ。とく。極樂に廻向して。往生候なり。次よひ  
 まが身此事。おても。人の事にて。此世の果報を。いの  
 り。又おたのちの世。此事。候なり。極樂なり。ぬ餘の淨  
 土よむ。此んと。も。都率に。む。此んと。も。い人  
 中天上よむ。あまんと。も。縁。うひ。く。此。く。此。も。こ。ま。よ  
 也。とれ。る。事。に。廻向。する。事。れ。く。して。一向。極樂。り。往生。せ  
 ん。と。廻向。す。べき。なり。ま。こ。此。理。候。も。ひ。さ。ぶ。め。は。ん  
 さ。ち。よ。こ。此。世。の。と。を。も。い。の。り。あ。ぬ。餘。の。こ。へ。も。廻向



まゝの功德ごとを。それよりほゞして。いまいふやうくを往  
生此業ぶいよなると廻向まがまきまきなり。すゞ一切の善哉。とな  
極樂に廻向まがまべると申せんとて。念佛一門いっもんは歸かへして。一向いっこうは  
念佛を申さん人のことほゞに餘あま此功德をほく里あつめ  
て。廻向せよと申すは佛ぶつの徳とくをすだぬるかたはほゞを  
たたくん功德をも。まゝ又また此このちなりとも。をのびう  
くたよりにあゞひて。念佛のほゞに餘あま此善を修する事  
あゝんをも。あゝなうなう往生此業ぶいに廻向まがま申まをと申事  
にて佛あり。此心こころ金剛こんごうのとくありて。別解べつげ別行べつぎやう此人こじんよや  
ゆゆ此この心こころ申まをは。はきり申まをはる様ようなり。異解いげの人  
よをへりきて。うう此この心こころは廻向まがま申まをなり。

金剛こんごうハは此この心こころ申まをは。たゞよとて。この心乃  
やや此この心こころ申まをは。金剛こんごうのとくなりと申まをは。此この心こころを廻向  
發願はつがん心こころとは申まをは。三心さんしん此この心こころありは。ちちらちく申まをは。一いっ心しんも  
ぬぬ。この三心さんしん此この心こころ申まをは。一いっ心しんも  
うけぬうけぬ。往生おんじやうすることをいふこと。善導ぜんどう釋しやく一いっ路ろはは此この心こころを。往  
生おんじやう此この心こころ申まをは。此この心こころ申まをは。此この心こころ申まをは。此この心こころ申まをは。  
安心あんしんとはなつたて佛あり。次つぎは起行きぎやうといふ。此この心こころ申まをは。  
此この心こころ申まをは。一向いっこうは念佛にぶつを申まをは。此この心こころ申まをは。此この心こころ申まをは。  
又またと行ぎやうまて佛ぶつを。極樂ごくらくにこの心こころ申まをは。此この心こころ申まをは。此この心こころ申まをは。

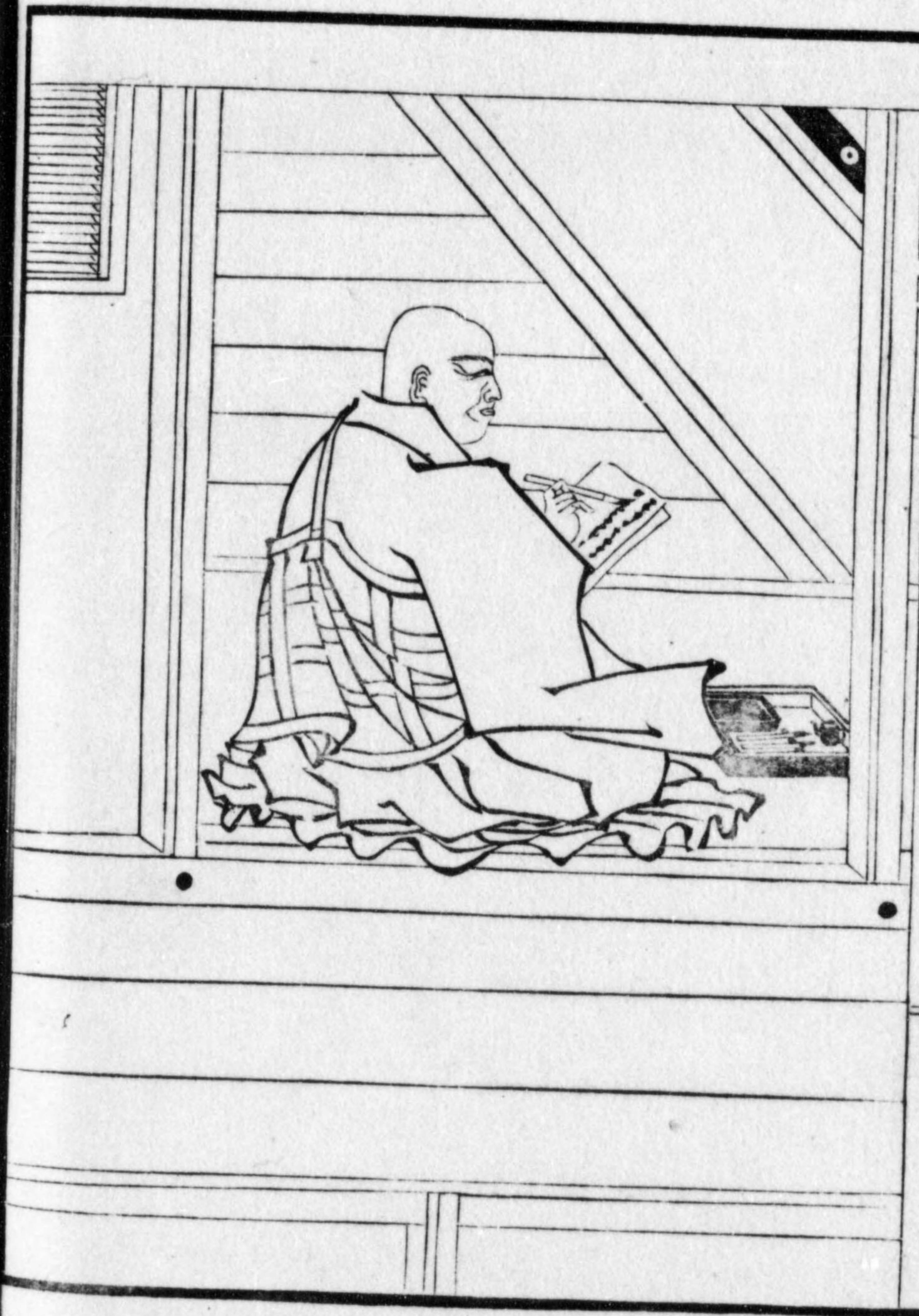


よ心をうけきりて。法とめ行むべきよて候なり。たふよを極樂  
 にむすれ候へき行よ。阿弥陀佛此本願よも。釋迦佛此説教  
 よも。善導此解釋よも。諸師乃料簡よも。念佛をりて本誓  
 とする事にて候なり。それほあ行い。どり目れたるれくをす  
 め路事候り候。さい候へとも。いげきもく聖教をたうひ。何  
 事にもたのひあてがひていれ申に。それふやうくを。そ  
 れなうくちとなう候やういぬとの候りよば。念佛いうよを  
 く信うたくたをいげん人の。又心のひんよあうがひて。い  
 つきの行めてを法とめんよあうがひて。極樂よ廻向せよ  
 と申候也

已上  
 取詮







又ある人。往生此用心よりきて。おぼはく此き事致百四十五箇條すてあまして。たゞ祿申せりけるに上人の返事ありた。少くも此を志るを

一心をこめて。心まかをり候り候とも。何事成をこたひ候り候とも。念佛をかりあても。浄土へいさひ候へきう答心のこころい。これ凡夫のならひよてちくちくをよびぬ事にて候。きこ心致ひこめりて。よく御念佛せさせをゆりく。その罪を滅して。往生せし勢強べきなり。それ妄念よりこれ罪を。念佛だよも志候へむ。うせ候



一 日所作ひくれらばす或さざえ候り候ども、よ由きんよまらひてよも。念佛申せぐき。答うす或はらどめのハ懈けい怠たいならう候へば。數かずをしらめ候らよき事にて候。

一 ぬきひる。席あをくひて。香かをせ候り候ども。法ほ祿ろくよ念佛に申せぐきやん。答う。念佛にたらうをさらいつ候ぬ事にて候。

一 念佛をひ日所作よいくくをらりあている申せ候ら候ら。答う。念佛のうずい。一萬遍をもど免て。二萬三萬五萬六萬乃至十萬まで申せ候らり。此中にあらう候らようせて。たらば一め候らん禮を申せれりますすべい。

一 五色に糸い佛よはひどうあらはし候き。まうよいいい川をのこよていくひき候ら候ら。答う。右た左たよてひくせ給べい。

一 齊い候ら。功こう徳とくよて候やん。うれらばまをぐき事にて候やん。答う。齊い功こう徳とくをうる事にて候らり。六齊此御齊ぞ。さも候ぬ候ら。又は大だい事まで。病やまもれくせれり。あらぬく候らり。あれくも。まま御ご念ねん佛ぶつにまより候らり。その地よて生死をまれき。淨じゆ土ちり往生せき。あらり。ままんずる事い。この地よもまるく候らり。一うあらば佛を見いく候らひく候ら候ら。いき申せ候ら。



とも人の申さん念佛をききても死う候り。浄土よい往  
生し候べきやん。答。うわくく候いと候ひくと云事候り候。  
佛よむうひまのしせ福ごとも念佛ごたもすれを往生し候  
なり。又聞ても志候。そまいしりく信心ふくて乃事に  
て候

一 ながく生死をたれま。三界にむすれごと。たれひ候よ。  
極樂に衆生とれまても。その縁えはまぬまいに。此世にむ  
あまと申いまとて候う。たとひ國王ともならう。天上  
にもむすれよ。あまく三界をわられんとれひ候よ。いう  
にほとめをこなひてう。歸り候いさらぶま。答。これも候

く此ひが事にて候。極樂へひとびむすれ候ぬまい。な  
ぐこれ世にうへる事候り候。これほとけならる事にく  
候なり。あまく人をさちびん事あまいことらぬまくこ  
事も候。さまとも生死よめくる人まて候り候。三界は  
ままも極樂よ往生するよい。念佛よすれらる事候い候い  
ぬなり。よりく御念佛候べきなり  
一 歌よむい罪もく候。答。あれぐちに得候り。但罪とれ  
り。功徳ともならる。  
一 酒のむい罪もく候。答。まといいのむ處くもたんまとも。  
まれ世乃ならひひ







むを辨めて候。せでよむい。功德と罪とをよ候。但いけ  
せでよ。よぬぬありも。よむいよく候

一 所作りきく志の純。うよてこのんずる候。お川志候いらに。

答。志のくいのをさうく候。うよてい懈怠なり

一 破戒此僧。愚癡乃僧。供養せんを功德よて候。答。破戒

の僧愚癡此僧を。ま束の世よは。佛のしくきとむ登此

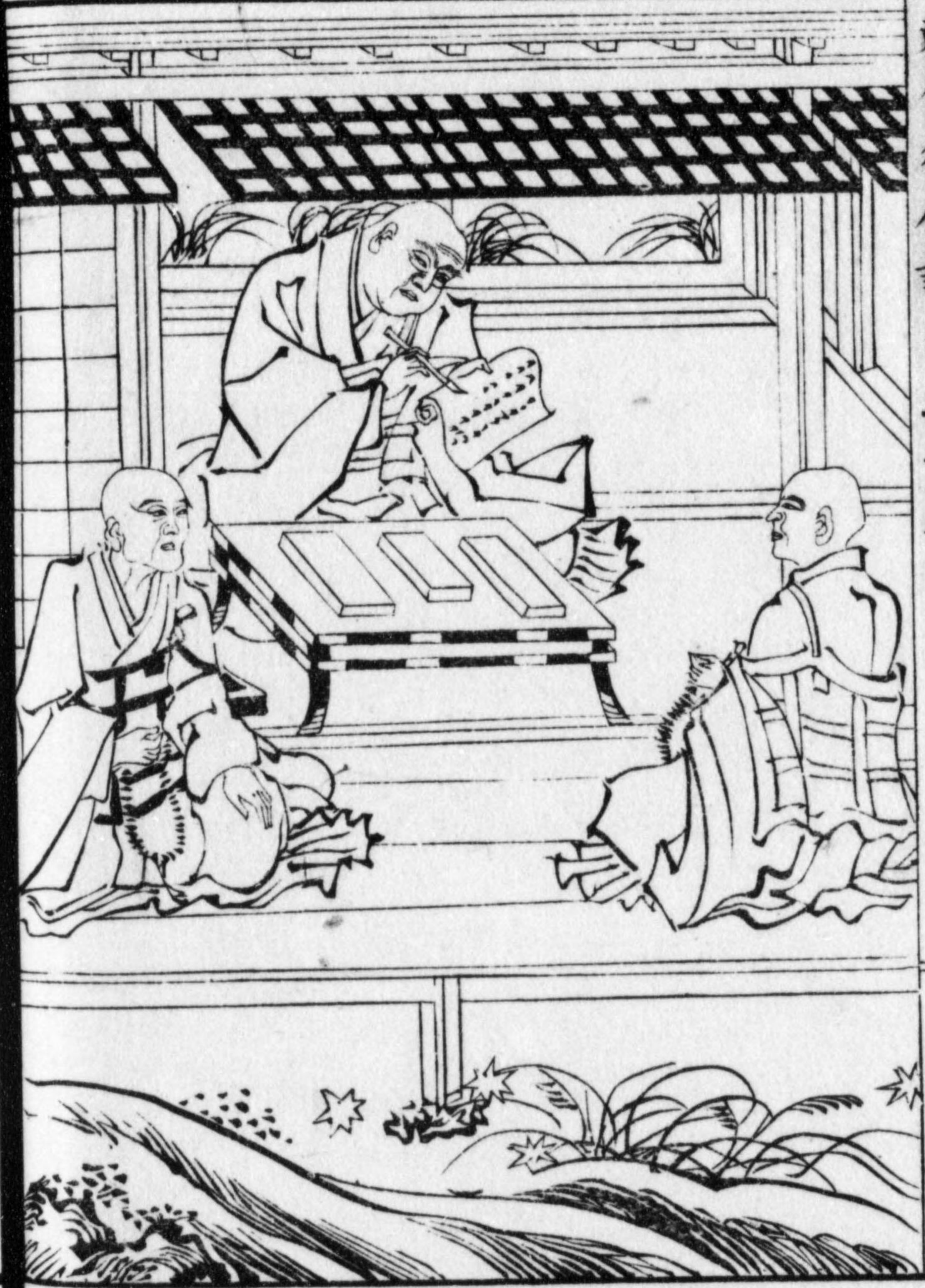
よて候なり。こ此使り申候ぬ。きくうの候く

此は詞い。上人のまさうた席となり。阿弥陀經のう

にをきり







勅修圓光大師御傳記第二十三

或人往生此用心よりきて。條此不審を尋申き  
りつらに。上人此御返事云

一 毎日此御所作。六萬遍。めでたく供。うつくしの心ご  
よも供ひのみ。十念一念も。往生ハ一供へども。多く  
申供へむ。上品よむす此供。釋ふも。上品華臺見慈  
主。到者皆因念佛多と供へむ  
一 宿善よりわて。往生すべいと人の申供らん。ひが事に  
てハ供は。くわを免の此世此果報だも。はき此世  
乃罪功德よりわて。よくもあしくもむす事にて



供へる。まゝして往生福此大事。うぬく次宿善よりうぬ  
 一と。聖教もも供やん。きん一念佛往生ハ宿善此  
 かににもより供りぬやん。父母をころし。佛身より  
 血伐あやしたる福の罪人。臨終より十念申て往生  
 すと。觀經もも見えて供。あつた宿善あつた善人の  
 を一へ供りゆども。悪よをもそれ。佛道よ心すむ事  
 にて供へむ。五逆なくは。いうたもしくはころす事  
 にて供なり。そまよ五逆の罪人。念佛十念にて往生  
 されど供されり。宿善乃たれりもよわ供よりく供。  
 されむ經よ。若人造多罪得聞六字名。火車自然去。

華臺即來迎。極重悪人。無他方便。唯稱弥陀。得生  
 極樂。若有重業障。無生淨土。因乘弥陀願力。必生  
 安樂國。亦乃文此心ハ。一五逆。此はくまわども。弥  
 陀の六字の名。たきうば。火車自然よけわく。蓮臺  
 きううてむうふ。又きハ免ておとさき罪人の。他の  
 方便なりんも。弥陀をとおへもそやうらむ。極樂む  
 するべし。又まうたもきさうわあまて。淨土よむする  
 た因なくとも。弥陀の願力よ乗たむ。安樂國うむ  
 するべしと供へも。あれまうも供。又善導此釋よハ。曠  
 劫よわこれく六道よ輪廻して。出離の縁なくん。常



没此衆生哉むめんがために。阿彌陀佛ハ佛よなり  
たすへりと儀。その常没此衆生と申儀ハ。恒河のそ  
こに志づきこころいき物乃。乃おほきにたぐくして。それ  
河よもいかわてえたるうう流。ついに志づきあつたに。  
惡世此凡夫をはたさうして。又凡夫と申を二  
の文字をハ。狂醉此ごとと弘法大師釋一たまわ。  
だにち凡夫の心ハものごころひ。ちけよるひさうがごと  
くして。善惡よつけく。たまひさごめさる事解一。一  
時ハ煩惱もたびあつたて。善惡もつたをま々  
まむ。いづきの行なりととも。わかちううしてハ行一がご

し。志うるに生死ををれま。佛道よいるにハ。菩提心を成  
く。煩惱をけくして。三祇百劫難行苦行一くこと。  
佛よはなうべきよて儀。五濁の凡夫つがちううにてハ。  
願行それハ事々れひごくして。六道四生にめくわ儀  
なり。殊陀如来これ事成のなり一と思食て。法藏菩薩  
と申し一いしへ。わさうが行一がごた僧祇の苦行を。  
北載永劫があひご。功をつと徳をうさうして。阿彌陀佛  
よなりたまふり。一佛よりそれへままへる。四智三身十  
か無畏等此。一切の内證此功德。相好光明說法利生等  
乃外用此功德。ちまくなうを。三字の名字此中よれ



とるいきて。これ名号を。十聲一聲までと。とならんも  
のを。うのくびむのん。もしむのんもは。とて佛よな  
らどと。ちうひほへるた。うの佛いま現げよ世よまへは  
て。佛よなりたまわ。名号はとるん衆生。往生うごが  
ふるうげと。善導ぜんとねはせし純て佛なり。これ様を  
ふく信じて。念佛をこたうげ申て。往生うごがね人  
を。他力に信じたるとも申候あり。世間此事に他  
力のげと。是あなえ腰うをたるもの。とをき道をあ  
ゆまんとねとらんよ。うのりよまを船車ふねぐるまよのわてやす  
くゆく事。こまわがちううにありげ。乗物のりもののちううな

まを他力なり。あさまき悪世にま乃。詭曲くわいきよくに  
ひよて。かまへはく里たるのわ物りたまを。かほ他力  
あり。まして五劫にありげ。思食しじくさまめたる。本願他  
力に船いふにのわなを。生死しじに海うみをま事ことら  
たぐひ思食べくとげ。まののこたうげ。やまひをいや  
を草木くさき。くろがまたまるま滋石しやく。不思議ふしぎに用もち力りきあり。麝じや  
香かういかうまき用もちあり。犀さいの角つのの水みづをよせぬらう  
あり。これこれ心こころをき草木。ちうひをたこさね。げまも  
のなままも。りりとと不思議ふしぎに用もち力りきのちかくちここを佛  
へ。まして佛法不思議乃用もち力りきはまさまげまんまや。とと



む念佛ハ一聲。八十億劫の罪を滅する用あわ。弥陀  
ハ。悪業深重此のりを来迎し終ちるまはすど  
思食さるる。宿善此あわぬ。一也沙汰せ。罪のふ  
りきあさたも。一也。名号となつるもの  
往生する。信し思食を修し。破戒を持  
戒を貧窮も福人も。上下此人をきく。一也。我名  
号を念に念せ。石ころを變じて金となさんかこ  
と。来迎せんと御約束也。法照禪師此。五會法  
事讚よ。彼佛因中立弘誓。聞名念我物来迎。不  
簡貧窮將富貴。不簡下智與高才。不簡多聞持淨戒。

不簡破戒罪根深。但使廻心多念佛。能令瓦礫變成  
金。も念ず。戒をせたり。一也。以舌念に念を  
と。一也。此を修し。悔怠もて修へ。一也。善導  
此。三縁此中の親縁を釋し。終。衆生は。けを禮を  
修す。佛こそ。見。衆生。佛を念ず。佛を衆生  
佛こそ。修。衆生佛を念ず。佛を衆生  
此念。た。阿彌陀佛の三業。行  
者此三業。と。佛を衆生。お  
や子の。親縁とな。佛を衆生。お  
手に。佛を修。佛を衆生。お



る。心よ念佛申をぞかと思食供り。佛を行  
者を念ト流る。はまを佛よ見えまひせ。念せ  
られまひせ。佛よまひせ。せまひ供り  
ずるれ。はは供へども。はひふはまのまひせ  
きにて供わ。三業相應此を免て供べ。三業とは。  
身と口と意とを申供なり。志も佛此本願の稱名  
ありがゆり。念此本神との思食をまひて供。さて  
我耳よきこゆる程申供ハ。高聲此念佛乃うちまて  
供なり

一 御無言目出たたく供。まひ無言なりて申念佛ハ功

徳すくなと思食なをあし供。念佛をバ金よ  
たどへき家事にて供。金ハ火よ多くまをいろまき  
わ。水よいろまを損せ供。やうに念佛ハ妄念  
此たころ時申供へども。まひを申はる。御念  
供まをまひ供。それより此心えなう。御念  
佛の程ハ。と事ませ供。いますう念佛此うす  
我まへんと。たぼへまを。はよて供。まひ思食  
す。ふと物など供供。あれあまひ。いっせこ  
れ念佛。むれしなうぬと。思食を以事ハ。ゆえく  
供。い供。いふりにて申供とも往生此業よて



供養く供

一百万遍此事。佛の願よてハ供りひんを。小阿弥陀經  
り。若一日若二日乃至七日。念佛申人。極樂に生ず  
ると。とう供く供へむ。七日念佛申べきよて供。その七  
日此ほと乃うずハ。百万遍よあうり供よし。人師釋  
て供へむ。百万遍ハ。七日申へきよて供へとを。たへ供  
ハざん人ハ。八日九日たむにを申はま供へり。は  
れむとて百万遍申はむ。衆人の。むまうはきよ  
ても供ハ。一念十念よきも。むま神供か。わ。一念  
十念よても。むま神供ほと。念佛と思供くき

さに。百萬遍の功德を。かきぬらにて供也

一七分全得此事。何乃まに申げよ供。さくくを逆  
修ハするこたに供へ。さ供へむ後乃世哉とてひぬ  
るまき人の供へん人も。そ是哉まのまずして。とれと  
とげきて念佛申て。いそき極樂へよいつて。五通三  
をほらうて。六道四生れ衆生哉利益。父母師長れ  
生野をたけ神く。心のまにむくとんと。思るまに  
て供也。ま。當時日ごの御念佛をも。うりく廻  
向しほりせ。是を供べ。なまき人のまに念佛哉廻  
向し供へむ。阿弥陀佛光をくれちく。地獄餓鬼畜生



をて〜〜後供へも。これ三惡道より去りて苦哉う  
くるも此。そのくろ〜こやとやわて。命をりわてのち。  
解脱ゲダツもべきにて供。大經云。若在三途ツ勤苦之處見此  
光明皆得休息。無復ハ苦惱。壽終之後皆蒙解脱  
一本願のう〜がう〜き事になし。極樂此福がり〜から  
ぬもていなきま〜も。往生一定やねもひる〜供て。  
とくまのわたき〜の。あさゆの志もく〜もね  
ほえずと供供と。ま〜によらぬ〜とにて供。淨  
土此法門をま〜も。きうげうが〜な〜。これ  
び三惡道よりいで。罪いま〜はま〜者なりと。經

りもとく供て供。又此世をい〜心れうす〜  
らせ給よて供。そのゆ〜。西國へ〜ん〜をい  
ぬ人よ。船ふねを〜せて供りんよ。ふ此水より〜事解  
とら〜がひ供〜も。當時〜て〜も。あ〜  
い〜ら〜も。供〜も。さ〜敵てき此城じやうな  
んどに〜る〜て供りんが。か〜〜て〜は  
と供りん〜に。大なる河海かうかいな〜の供て。わ〜る  
様もな〜んたわ。親おや此とより。船ふねを〜うけ〜む  
へよきび〜ん。け〜あ〜て。い〜か〜ら〜  
く供べき。これが様に。貪嗔煩惱おんぜんぼらうの敵てきよ志〜〜供て。



三界さんがいに焚籠どんろうりこえりて是たす我亦哉わがも殊こと陀た悲母ひぼ此  
以志いしふくくして。名号なごうに利劔りけんをもちて。生死しじ乃すなはまじ  
か銭せんきり。本願ほんがんの要船ようせんを苦海くかいに波なみにうく。うれ  
岸きしにけしきふんやと。思おもひほんんうう進しんししはは歡かん  
喜きにあ涙なみだ袂たもとをあり。渴かつ仰がうの思おもひた肝かんをむむむささよ  
てほ。せめて身みに毛けをいもぎひひ程ほどは思おもべたにくてほ  
を。ののに思おも食じ供くへん。本意ほんいなくほへん。それもこ  
とりわらてほ。罪つみはくる事もをくく供くへん。それもこ  
心こゝろもそもそて是供くへん。そのゆへに。無始むしよりこのころ。六  
趣ろくしゆのころ。時ときも。形かたちはうにれども。心こゝろはうにれども。

色いろはあらわくよ。はらわらなくひく供くへん。今いまもうの  
くくかかくく。金かねもうちをはらくまはらくまはらくま。念ねん佛ぶつ申まをて往生じやう  
せらわと思おもふ事は。此こゝろ度たぎもうちをてつづつに聞得きえたら  
事こともて供くへん。むきことを信しんぜるに供へん。ぬなをもりたら  
へ。人ひとの心こゝろは頓機き漸ぜん機きとそ。あらわれは供へん。頓とん機き  
ハ聞きてふくてはらる心もて供くへん。漸ぜん機きハをうくはらと  
る心もて供くへん。もれもうてならずを志供くへん。是こゝろ  
もやきんハ一時じもまいわはらくあくあ。是こゝろをもりたらは  
日ひ々々にまうれのぬ様さまは供へん。もよいら心こゝろにま  
も供へん。遠とほくももらげ供へん。福ふくももりたらは心こゝろにま



らせ給儀なり。年月成るまで。信心を好く  
なせ給ひます。へきまで儀

一日比念佛申せども。臨終りんじゆう善知識ぜんちしきあり。彼を往  
生じやうじやうか。又念ふねむ大事だいじと。心こころをたれ。往生志  
う。と申儀。い。い。と。進しんて儀。善導ぜんどう此  
御心ごしんよて。極樂ごくらくを。い。と。心こころを。多おほくくも。少すくく  
も。念佛申さん。命いのちは。ま。ん。時とき。阿彌陀佛あみだぶつ。聖衆しょうじゆう  
と。来きて。迎むかへ。給たまべ。と。儀。日比ひび。念ねんに。御念佛  
儀。御臨終ごりんじゆう。善知識ぜんちしき儀。と。佛ぶつハ。迎むかへ。せ。給  
ふ。べき。に。て。儀。又善知識ぜんちしき此力ちりきよて。往生じやうじやうも。申ま儀

事ことハ。觀經くわんぎやう此下三品このしたさんひんの事ことよて。下品下生げひんげじやう此人このひとなり。と  
し。日比念佛ひびねんぶつも申儀。往生じやうじやうの心こころを。儀。逆罪さかざい  
此人このひとの。臨終りんじゆうよ。と。善知識ぜんちしきあり。十念具足じゆねんぐそく  
て。往生じやうじやうする。に。て。儀。日比ひび。他たカ。願力がんりきを。た。儀。  
思惟しゆい此名号このなごう。唱なへ。極樂ごくらくへ。思おもひ。儀。人ひと  
ハ。善知識ぜんちしき此力ちりき儀。佛ぶつハ。来迎きやうじやう。給たまふ。儀。と。て  
儀。又また。病やまを。せん。祈いの儀。心こころを。儀。ハ  
儀。病やまも。せ。ぬ。人ひとも。儀。時ときよ  
ハ。斷と末摩まつま乃すなはち。儀。八萬はつまん此塵勞ちんらう門かど。無量むりやう  
此このや。身みを。せ。儀。事こと。百千ひやくせん此このほ。と。身みを。き



わはくがごとし。されを眼を起がごとくして。忍んたれも  
そのをもし。舌根をくもて。いんと思ふもいんれ  
を能あり。こまハ人間のハ苦のうら乃死苦こそ能へも。  
本願信じて。往生移ひ能はん行者も。これ苦ハの  
能へて。悶絶し能へも。息絶えん時ハ。阿弥陀ほと  
けの力にて。正念となりて往生能へも。臨終か  
すぢまゝの程乃事して能へも。九夫はてめが  
くも能へも。佛と行者と此心くもあぶく能なり。そ  
のうへ三種の愛心をくも能へも。魔縁たより能へ  
も。正念を失ひ能なり。此愛心を。善知識力くも

りにくハ。乃そ能くも。阿弥陀ほとけの力にて。  
のぞくせ能くも。諸邪業繫無能碍者。たれも  
思食べく能。又後世者とたぼり。き人乃申げも能ハ。ま  
げ正念り住して。念佛申せん時。佛来迎志をまふ  
能しと。申げも能へも。小阿弥陀經ハ。與諸聖衆  
現在其前。是人終時。心不顛倒。即得往生阿弥陀佛  
極樂國土と能へも。人の命をくもす。阿弥陀  
ほとけ聖衆とともに。目此前よ来迎たれんを。まげ  
まいらせ。後ハ。心ハ顛倒せ。極樂にむも  
とくも心得て能く。はるき病滅せ。やといの



らせ後んといはる。今一遍も病なれた時念佛を申て。臨終の阿弥陀ほとけの来迎に預て。三種此愛心をのぞき正念よなきを脱すのうせて。極樂よ生れんと思食へを供はさばとていづるに供ぬるん。善知識にむらうをいんと思食を盡きにて供ひ。先徳達此をへよ。臨終此時。阿弥陀佛を西此壁に安置しよいらせて。病者それ前よ西向り卧て。善知識よ念佛をすすめ。神よとて供へ。そ通るをあくはほしき事にて供へ。但人の死乃縁はうて思悔よをいひ供ひ。俄よ大路よをいり事よ供。又大小便利のふよと志

ぬる人を供。前業のが神がうて。た刀をいりて。命我失ひ。火よやけ。水よたがきて。命をほろぼすまじ多供へも。た様よと志に供と。日比念佛申て。極樂へまいる心だよを供人なると。息れきえん時。阿弥陀觀音勢至来て。迎へ送ると。信し思食を起して供なり。往生要集よも。時處諸縁を論せ。臨終よ初て往生をいり免れよ。その便宜をえたる事。念佛よはあつたて供へむ。あれをいり供

一 所作おほくあそびひく。かんとより。すをいり申さん。

一 念をむらうなると。い供事。實よさも供なん。但



礼讚此中よは。十聲一聲定得往生。乃至一念無有疑  
心と釋せしめて供へども。疏の文よは。念く不捨者。是名  
正定之業と供へむ。十聲一聲よむまると信して。念く  
にすすむ事なく。とたふふ念きにて供。又殊陀名号相  
續念とも釋せしめて供。されむあひはは念ひ念ひ念ひ  
よて供。一食此間に。三度ばかり思ひおん。よき相續  
にて供。常らだよ思食おさせ給供。十萬六萬申は  
せ給供。次とも。相續よて供ぬべきれとも。人の心。當  
時思ふ事。きく事に。うけるものよて供へむ。なよと  
なく。よまきよれうちにも。思食いん事かて供ぬ

へく供。以所作れほくあて。ついにす成りてせ給供  
り。思食いで供ぬと覺供。きよひこののちんをありく。  
うせたりありて供も。あさゆや。かきつる事よと  
思食供。以心よりの事給供。んをるそり。とて  
をかくても。以こを給供。相續にて供へ。又ら  
けて供。ん以所作を。次の日申入。給供。ん事。はも  
供。なん。それもあす申入。給供。んすまを。とて。以ゆ  
ん供。ん。あて供。せめて此事にて。て供へ。御心  
得。あてく供。

一 奠鳥に七箇日乃忌の供なる事。はをや供らん。えん



及つ伏た。地が祈いきと。い々あれた。此この過去ちちに父母ちちと  
 てた。伏た。此この事ことにてた。伏た。又また臨終りんしゅうの酒さけ  
 魚いそ鳥とり葱き薤ら蒜いなどは。いちちは。事ことにてた。伏たへた。屋やま  
 ひらどくきりにたりて。いちちは。事ことにてた。伏た。いちちは。  
 當時とうじきとた。ぬる。いちちは。病びやうにた。月つき日ひはたり。苦く痛いたを  
 志しのびくく伏た。いちちは。ゆらはた。此この伏た。いちちは。とた。覺かく伏た。いちちは。  
 ぐく。念ねん佛ぶつ申まを。いちちは。思し食じてた。此この療りやう治ち伏た。いちちは。命いのちれ  
 一いむむのし。往わう生じやうれた。いちちは。病びやうをた。療りやう治ちいちちは。  
 此この伏た。いちちは。とた。覺かく伏た。







鎮西より上洛せば修行者。上人乃庵室より集りて。い  
 りが見系に入さる先ん。御弟子に對して。称名れど紀。佛  
 の相好よ心をくくることはいくば。佛へきと。尋申られども。免  
 であくくそをけしと申さる。我。上人道場にて聞路る  
 が。明障子被あけ給て。源空ハあう。次。た。若我成佛。  
 十方衆生。稱我名号。下至十聲。若不生者。不取正覺。彼  
 佛今現。在世成佛。當知本誓重願。不虛衆生稱念。必得  
 往生と。た。ゆ。わ。わ。わ。我等が。か。ま。て。い。う。に。觀。を。も。も。  
 更。又。如。說。の。觀。ふ。あ。う。い。た。ゆ。く。本。願。を。た。の。も。と。口。よ  
 名号を唱るの。假令。な。ら。ば。行。な。り。と。ぞ。傳。く。ま。も。も。







勅修圓光大師御傳弟二十三終

勅修圓光大師御傳記第二十四

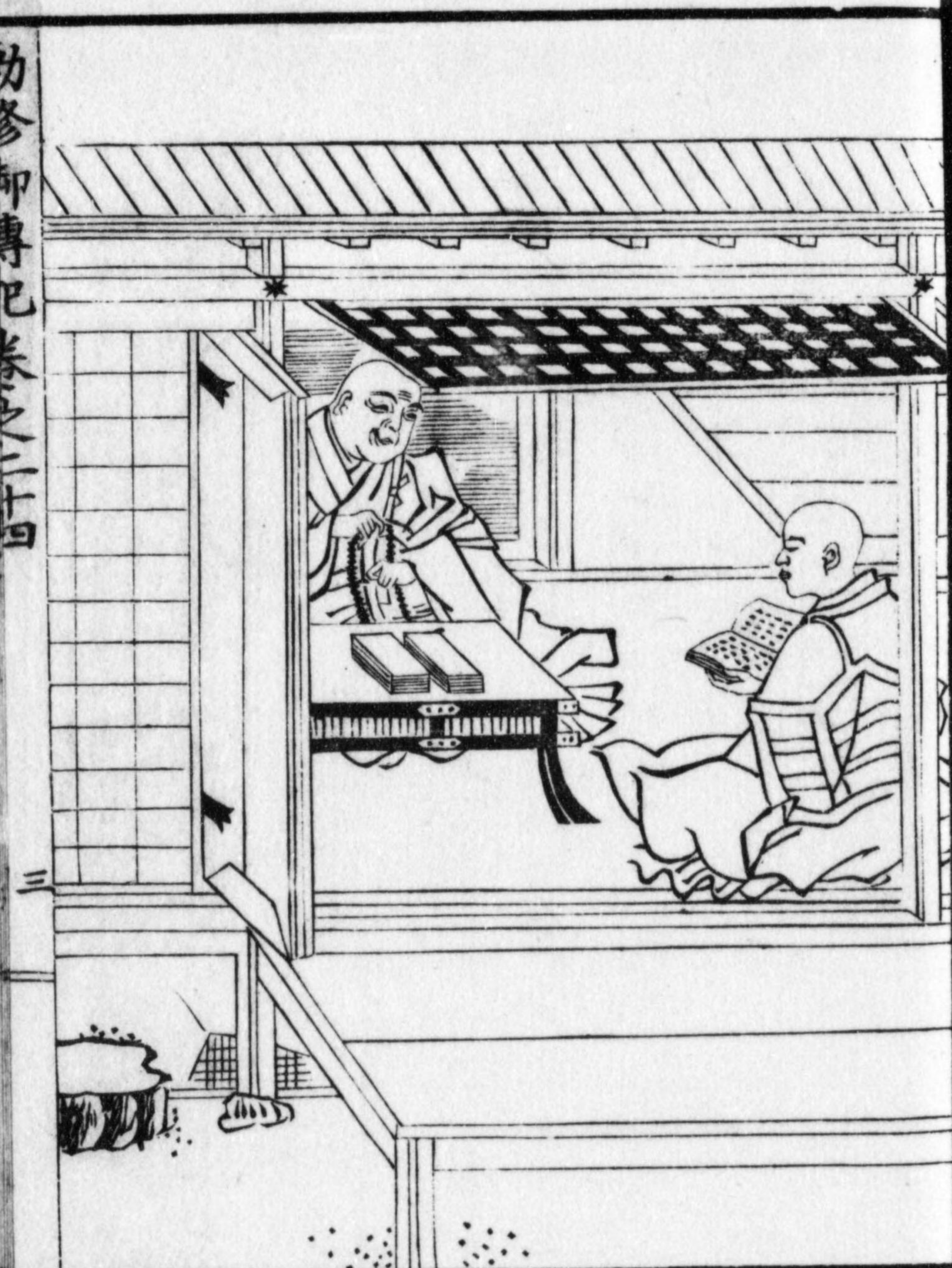
上人の語り。阿彌陀經の。念ふ念佛往生するなり。我説とは心得るなり。文は隱顯ありといへども。廣略は義致をて心うまひ。四十八願をとりて説法へる經なり。舍利弗。如我今者。讚歎阿彌陀佛。不可思議功德といへる。阿彌陀ほとけの功德。即四十八願なり。念佛往生致さくは。そ此中乃第十八の願をさだたり。又此經よ。一日七日や云へる致。たぐ一日七日よ限と意得るは。僻事也。善導和尚の觀經乃疏に。上品上生は一日七日を釋し。從具此功德以下。正明修行時節。延促上盡一形。下至一日一時一念



等或從一念十念至一時一日一形大意者一發心已後誓  
畢此生無有退轉唯以淨土為期也判一終つり此釋をこ  
て准知するに阿彌陀經此一日七日也又如此意得應き  
也此釋よ三比意あり一よい多あり少よ至り二よい少  
より多り至り三よい大意い一發心已後退轉をい  
つるなり初の二ハ要よあれを後比一と此要なり所詮  
ハ往生此心を發してのち命終まで退せざるあまは  
大意とするなり凡此阿彌陀經ハ我朝り都鄙處こに多  
く流布勢也法華經と取勝王經とは諸宗此學徒兼學  
まぶきし拒武天皇の御時宣旨を下されく定置ま

りは演說者として法華經解説する師ハ多くあり  
此ども暗誦も人ありなきハ法華經暗誦すべきし重  
て宣旨を下されたり持經者多くいできたなり法華  
加樣り宣下によりてしそ流布せしきたる阿彌陀經ハ  
其沙汰あり此ども自然よ流布して處く此道場にこれ  
例時として毎日にうけし後阿彌陀經をよむ一切の諸僧  
阿彌陀經をよまふと云事なりこ此偏よ淨土教有緣此  
よ此不也事れおろりを尋此ハ叡山の常行堂より出た  
り彼常行堂の念佛ハ慈覺大師渡唐此時將來一終つる  
勤行なりとそ信く此なる







上人のこまろく。諸宗此祖師ハ。これ極樂リ生シ給ヘリ。  
 所謂真言の祖師。龍樹菩薩。天台此祖師。南岳智者。章安妙  
 樂等。三論の祖師。僧叡。華嚴の祖師。智儼。法相宗ハ。懷感  
 禪師。本宗成まてく。浄土宗ハ入る。天親菩薩ハ。法相宗此  
 祖師なり。往生論を作て。極樂をすくむ。達摩宗乃祖師。智  
 覺禪師ハ。上品上生此往生人なり。其外名僧此中ハ。往生  
 人此多シ。あぐほよ違ヘリ。次







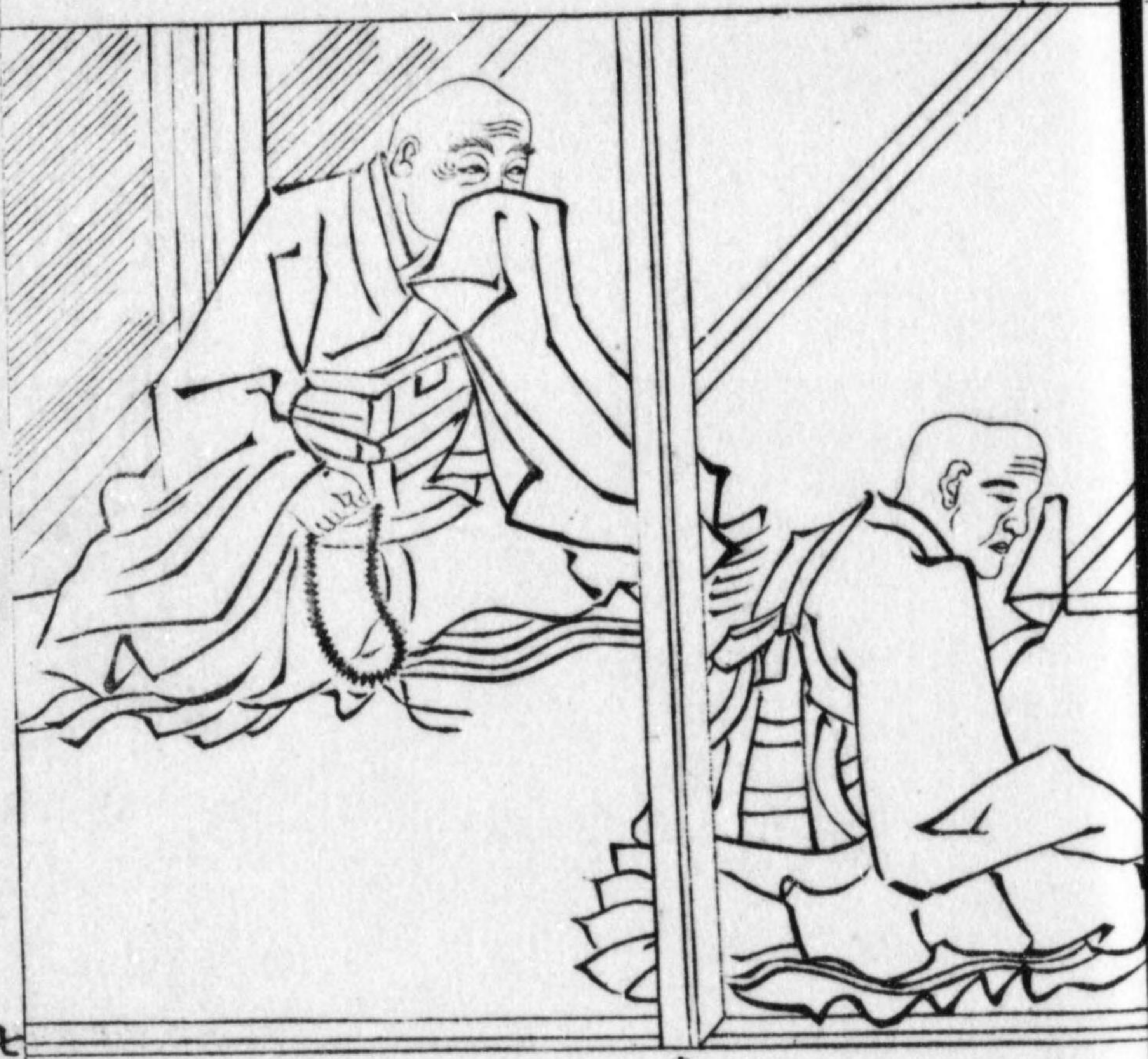
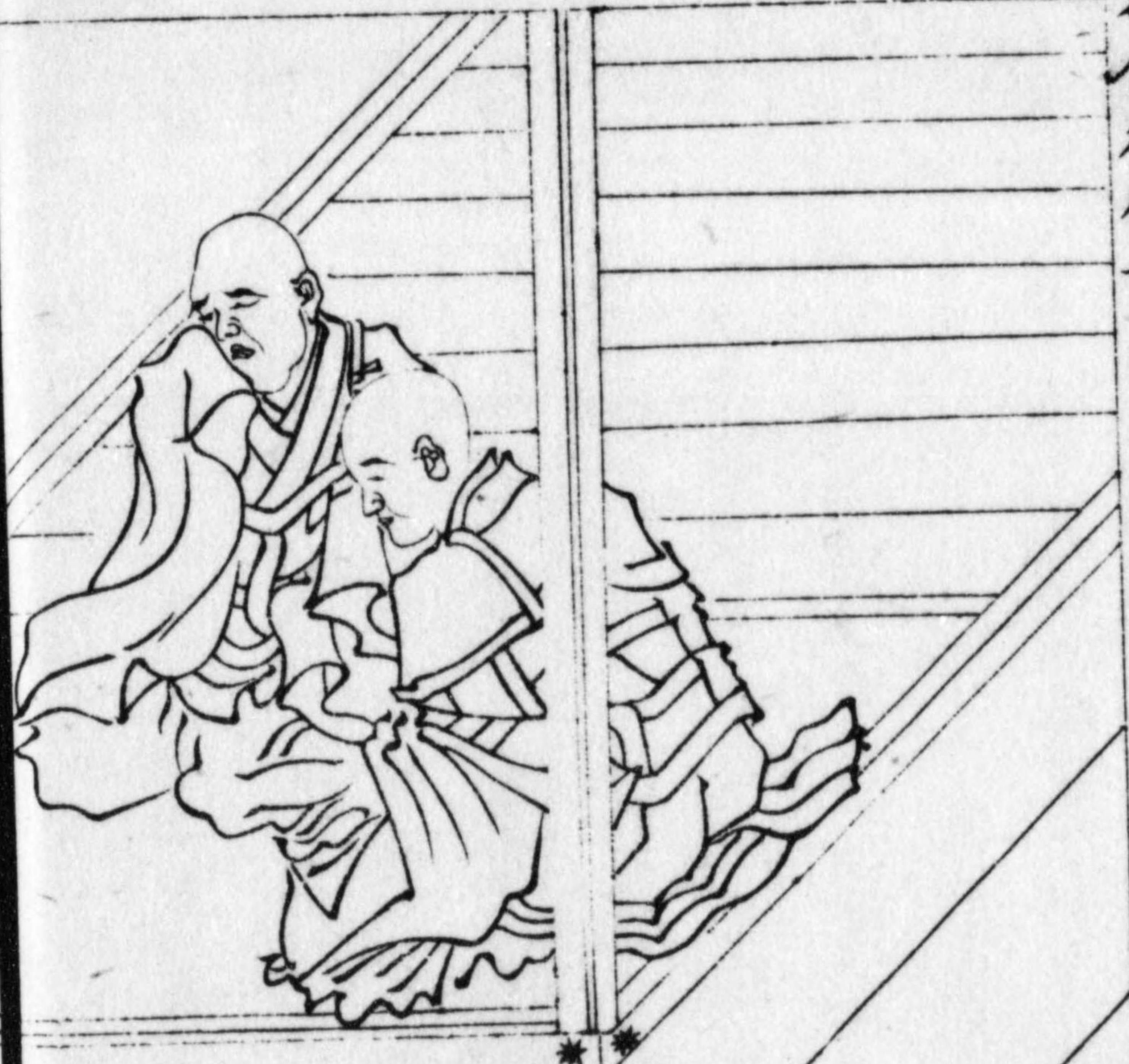
或時聖光房法力房安樂房はるるに安樂房上人は尋申  
 て云。我はまの輩かこ十重をもちたれははにま  
 念を成し。又勇猛精進なはして。身は善惡をも  
 うへりて。彌陀の本願を信く。決定往生は思ひあ  
 へる。い。往生はゆるべしやと。上人のこまもく。其條勿論  
 也。所詮決定心を生ずも。往生するまき人あり。煩惱罪惡等  
 此。往生は障不障をへ。凡夫の心まてい。覺知すく。決とい  
 へくも。本願は相應する程に念佛申たらんよ。い。そまは  
 障導して。往生はゆるべし。留罪はあるべし。決。往生は念  
 佛の信否よふるべし。更は罪惡は有無よふるべし。



るなり。すゞよん夫の往生をゆるん。あんと妄念わうねんの有無成  
きぬを慮りきやと仰うる。に安樂房又申まて云。虚こ假けれ  
者ものも往生せよと申まをは。何様なにようも心得こころえはべきぞや。上人じやうじんの  
語ことば。虚こ假けといふ。もろくに縁えん構かまする輩たぐひなり。好このまはし  
て。自然しぜんり虚こ假けならん。往生じやうじやうの障さうもあはれ。念佛ねんぶつの信心しんじん  
を教たたらん人ひとい。必定ひつていして往生じやうじやうまべし。更さらり疑うたがふから  
波なみ善ぜん導どうれ釋しやくを能よく心こころうぶきなり。善ぜん導どうたり。まはらざるは  
まはらば。もろにこれいふこれとび生死しじふを離はなへきやと。何  
しこれて。落おち波なみし路ぢ間ま。聖せい光くわう房ぼう。法はふ力りき房ぼう。安あん樂らく房ぼう。これとて。に。涙なみだ  
をたきて。信心しんじんをまゝなり。其時そのとき聖せい光くわう房ぼう。これい一切いっけつも

往生じやうじやうを疑うたがはれと申まはれ。上じやう人じん又またのたまはる。貴き房ぼう  
達たつい。少すここれ罪ざい過がありとて。争まを往生じやうじやうを遂まげらんや。但たゞ外人じやうじん  
よは。意い得とくていひきう波なみをたあり。強かう盛せい心しんをたは。波なみ落おち  
涙なみだするに及および波なみとて。念佛ねんぶつごにも申まさば。往生じやうじやうを慮りき  
なり。見み思し塵ちん沙しゃ無む明めいれ煩わづら悩なうが。よろげの障さう導どうをばなれり。  
念佛ねんぶつ乃すなはち一行いっけうい。この煩わづら悩なうもろくは。往生じやうじやうをとげ。十じゆ地ぢ  
究くわう竟じやうするなり。他宗たそうい。實じつ教きやうも。權ごん教きやうも。密みつ教きやうも。顯けん  
教きやうも。十じゆ地ぢ究くわう竟じやうする事ことい。漸ぜん頓とんを論ろんぜ。波なみきつめ。は大事だいじな  
り。まづのにも。念佛ねんぶつ乃すなはち一行いっけうありて。往生じやうじやうをとげ。十じゆ地ぢ願げん行ぎやう自じ  
然ぜんに成就じゆじゆする事ことい。誠まことり甚じん深しん殊しゆ勝しやうれ事ことなりと。仰うはれり。





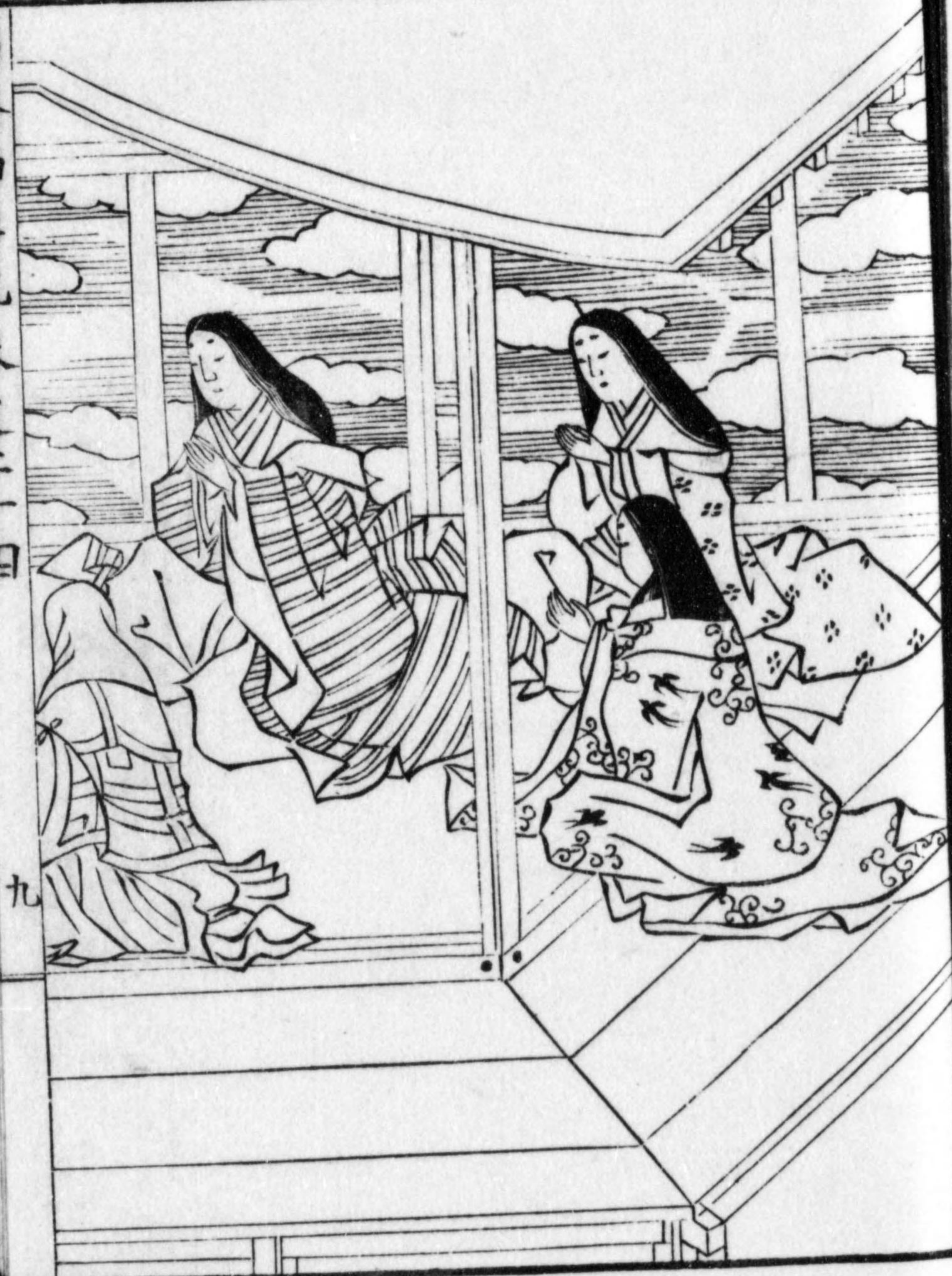


元久二年正月廿一日。尋常なる尼女房達。あまの上人此  
以房へ参りし。戒をも受たてしつり。念佛往生此様をも  
兼らんと申々此ハ。上人先戒を授ら此。其後浄土此法門  
をのぞ路よ。まづ聖道浄土乃二門を分け。聖道難行此  
様を修しゆ。此ハ天台宗と對して釋し給ひ。四種三  
昧の難行なる事此の之路て。南岳大師入滅此きげ。諸  
の弟子よつぎての路も。汝等方等般若四種三昧りを  
いて。身命成りり。汝修行まぶく。且此十年世よありて。  
汝等成供給す。成しと乃路り。苦行のなむく。此よ  
りて。弟子等返答よ及いば。大師入滅し給き。師

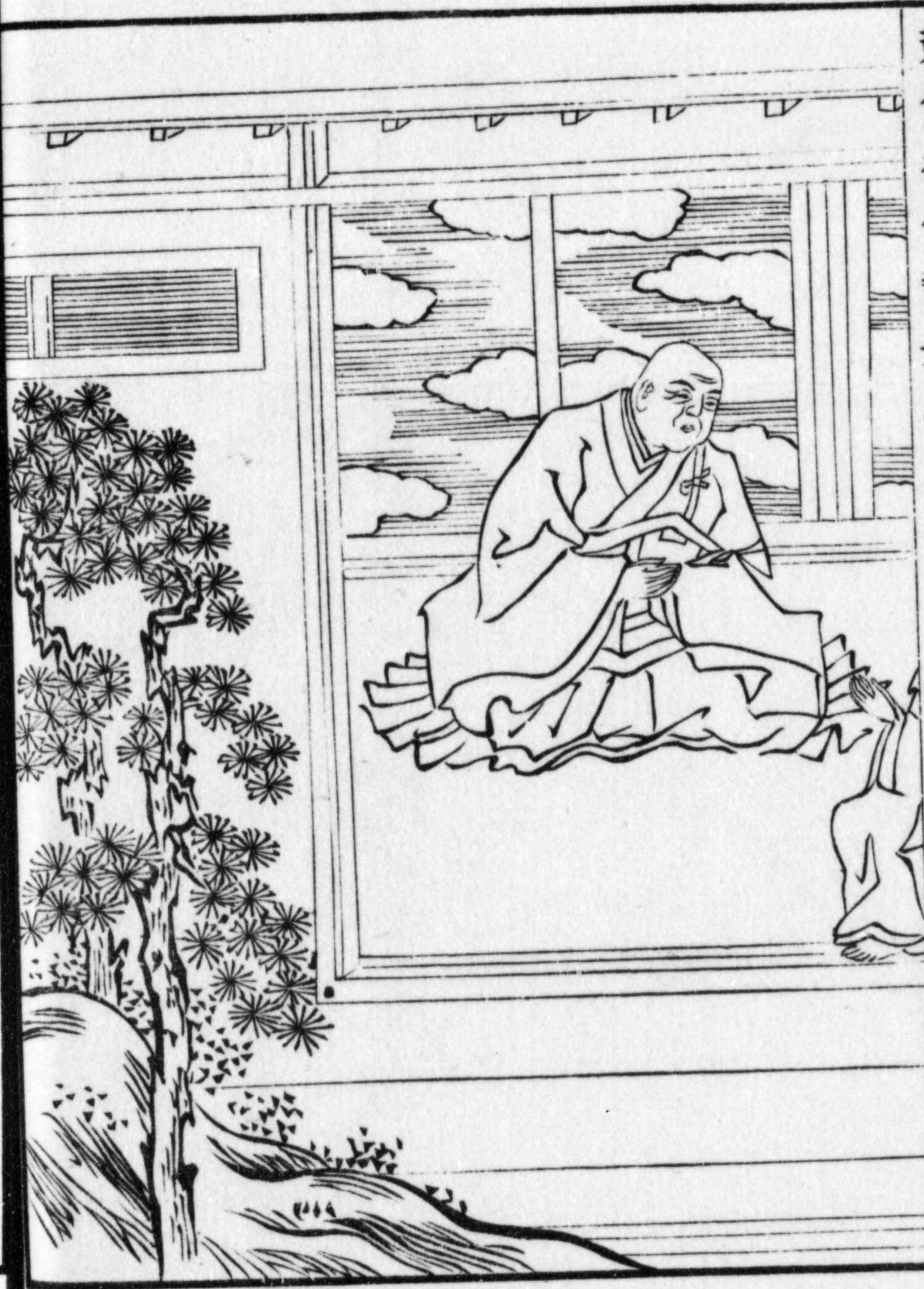
已よ入滅せん。路つる。志むく。も存命せん。この路ハ  
んをば。いづれも妄語をも。うあへ。師乃命を惜ま。んた  
め。修行志てん。や。申し。川。層々。ま。と。始終の  
たふべ。く。ち。る。間。返答せ。成し。て。を。ら。に。う。ば。師を。れ。ら  
入滅し給つり。何況當時此我等をや。傳教大師弟子達よ。  
四種三昧を一。川。あて。修行せ。き。成。く。も。事。ゆ。き。慈。覺  
大師ハ。常座三昧よ。あ。り。て。修行し。給。々。ら。ん。常座難行  
なり。と。て。何。く。た。め。て。常。行。三。昧。と。れ。る。と。申。せ。ま。か。く。此  
い。と。き。の。修。行。ハ。上。古。よ。り。修。し。が。た。事。顯。然。あ。り。何。況。當  
世の凡夫をや。と。て。聖道門の難行れる事。浄土門乃修し



座まき様。こまくと信じて。所詮未代の佛法修行。その  
證をうる事只念佛の一行なり。是則弥陀乃本願よ順む  
るのゆへありとの路々池も。信心實をいへ。位頭合掌して  
歸りにたり







法性寺大信實朝臣此伯母なりける女房乃尋申  
 々々に法きて上人の返事云念佛の行者此存候へき様  
 ハ後世候をそ祀。往生を祈ぐひて念佛を祀ををい留時の  
 礼を来迎せしめ候なり候存じて念佛申より外の事  
 候ハ次三心と申候もふきよく申時い。と一此願心よて  
 候あり。その祈ぐ心はい川つ流。のいぬ方候也。至誠  
 心と申候。此心此實にて。念佛を祀を臨終り来迎をとい  
 ぬ事候。一念もろくろぬ方を深心とい申候。これうへ日身  
 をの此土へむす祀んと祈むひ。行業をも往生乃たぬと  
 むく多候。廻向心とも申候あり。此故よ祈ぐ心い川い

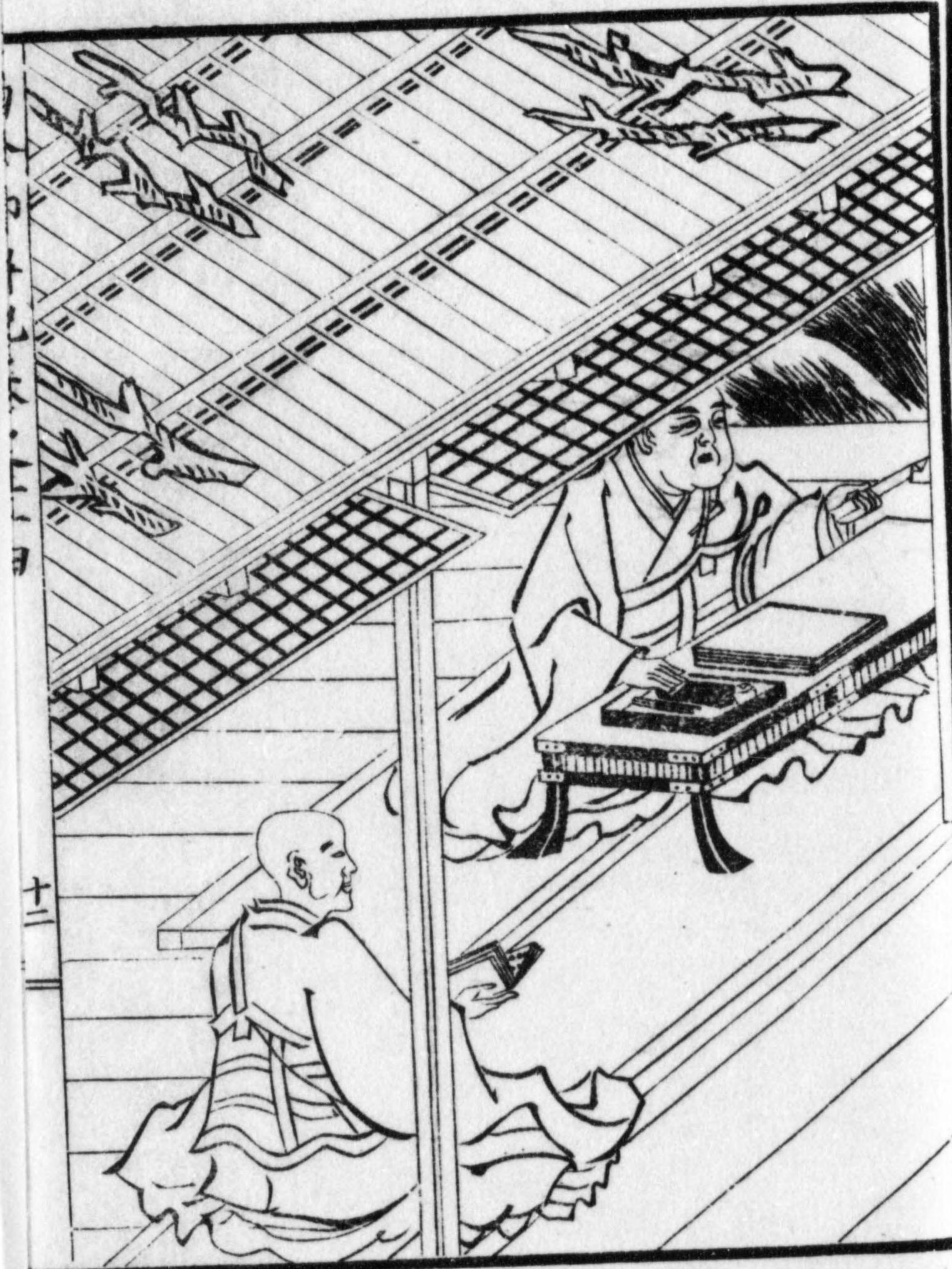


くはくく。ぐよ往生せんと思ひ候へむをのづく。三心の具  
足す事にて候あり。持中品下生に。来迎の候りぬ事い  
あるやうに候を。さうまぬよてい候い候。九品往生り。各こ  
れあるべき事候。略せしむてたなき事候也。善導此候  
心の三心を品こにしようて。あまーと見え候。品こに候  
はく此事候へとも。三心と来迎とい。これら候ある候きに  
て候あり。往生候候がん行者い。必三心を候へ候。候きに  
て候へを上品上生に候をさきて。餘此品こを候。あま  
よなぞへて。あまーと見え候。又我ホ戒品の舟筏  
を候に候たきた。生死乃大海を。さる候き縁を候り候。

智慧此光もくろう。生死乃やま候て〜が〜け候も。聖  
道の得道よもまきたる候に候らうのため候。ほ〜〜候。他  
力と申候。第十九の来迎の願よて候へむ。文り見え候  
候と。これら候来迎候あり。ゆえ〜候ら  
〜候〜候。あるし〜

源空





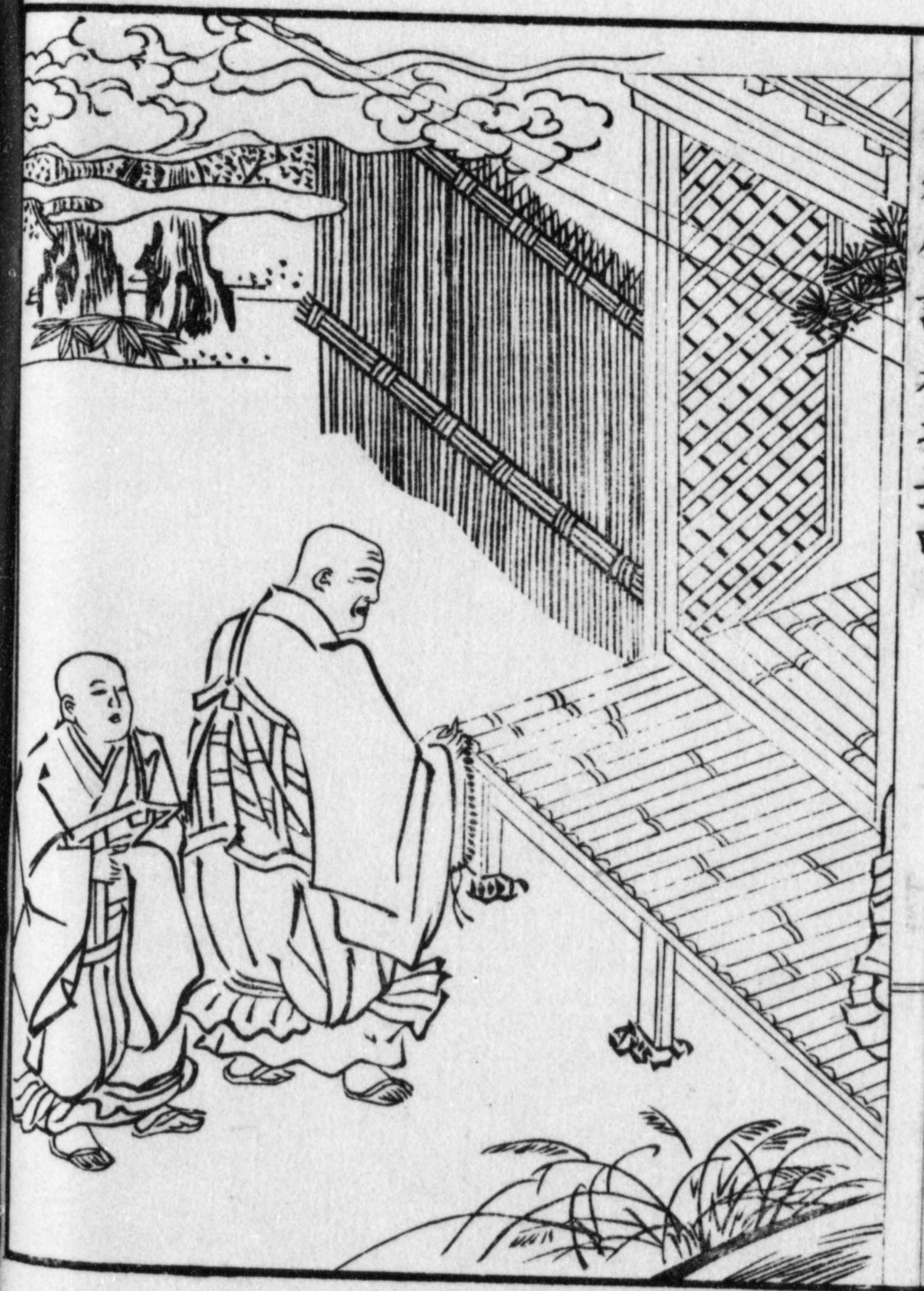


伴豆國を湯山に。妙真と云尼ありき。法華乃持者。真言  
 此行人なり。事乃たよきあり。上洛のとき。上人の教  
 化よ。後。あぐ餘行をすて。偏よ念佛を行む。その功  
 けをりて。つよに化佛をえとてすつる。更り餘人よめ  
 け。次。あぐ同行の尼一人よ。此を志めす。ある時不註明年月明  
 日。此申尅よ。往生すべしと。いふ。更よ。やすひぬく時尅。たが  
 け。翌日申時。端座合掌。高聲念佛して。往生候と。い  
 け。樂天よ。きこえ。異香室よ。ちちて。奇瑞耳目を驚。けり



力多印專巴美二二四終





明治廿四年一月十日印刷  
同 年一月廿六日出版

翻刻印刷  
兼發行者

東京府平民  
宇田總兵衛  
京橋區南傳馬町  
三丁目番地



